

姫路市立美術館
研究紀要
第10号 ■ 2009年

B U L L E T I N
O F
H I M E J I
C I T Y
M U S E U M
O F
A R T

姫路市立美術館
研究紀要
第10号 ■ 2009年

B U L L E T I N
O F
H I M E J I
C I T Y
M U S E U M
O F
A R T

目次

和田三造文献紹介 「南風」の頃 平瀬 礼太	1~17
—高校生学芸員による展覧会 「ぼくらの視点×あなたの出会い」を終えて— 本丸 生野	19~48
[研究ノート] 武石弘三郎について(その1) —作品とその現状を中心に 山田真規子	49~59

和田三造文献紹介 「南風」の頃

平瀬 礼太

姫路市立美術館では2009年9月12日から10月25日まで「和田三造」展を開催した。30年ぶりの個展として代表作「南風」をはじめ初期の油画作品から日本画、装飾、工芸、デザイン、色彩、版画など多彩な表現世界を紹介した。内容については展覧会図録を御覧いただきたいが、調査の段階で確認した多数の資料はその中に盛り込むことができなかった。初期から晩年に至るまでの文献、新聞・雑誌記事など様々なものが存在しているが、ここではその中から活動初期にあたる1900年代に和田三造が自らしたためた文章を中心に掲載していきたいと思う。それとともに三造が後年に初期の活動を回顧して筆をとった文章についてあわせて紹介し、「南風」をはじめとする作品を制作し、留学した時期前後（1905年～1915年頃）の三造の制作状況について確認してみたい。

1. 「大島日記」

最初に雑誌『L.S.』に掲載した「大島日記」を紹介する。「南風」が伊豆諸島に向かう途中での漂流体験がもとになっていることは周知のことであるが、三造は「南風」制作前に伊豆大島での滞在体験を三蔵法師という筆名で記していた。『L.S.』はLightとShadeの頭文字を合わせたもので2号までで終刊した雑誌であるが、「大島日記」は2号連載の形で掲載されている。

三蔵法師「大島日記（一）」『L.S.』No.1（1905年7月8日）

不揃ひ不完全ながら、吾々友人及び吾々の企て此小雑誌が出来たに付ては、余り画一点張りでも聊か物たりないから、何か記事を添へたいと云ふので、他の諸君は得意の歌なり文なり詩なり俳句なり、各々婉麗な筆を馳せられたが、僕にいたつては素より文才などと云ふ者は葉にもしたくもない様な始末だ、其れで諸君の様に歌とか文とか、そんな趣味のある六ヶ敷い者は到底書ける筈がない、しかし何でもかんでも書かねばならぬ此場合、さらばと盲人蛇の流儀で無頓着にも大島日記と名づくる、無味乾燥な要領を得ない旅がたりを書いて見ようと思ふ、之れは去る夏僕が七十日近く彼の地に筆とカムパスを友に過した折りの覚へ書きで、名は如何にも大層だが実も花もない反故紙に違ひないのだが、これでも未見の士の案内ともなり旁余白を埋むる料ともならば幸甚、

伊豆の大島は、今迄珍らし者好きの人士が年々夏冬に渡航して、其地勢地質風俗習慣などは、己に理学者小説家農学家其他色々の方面の人に依て充分紹介されては居るが、未だ画家の消息は余り耳にしな、元来大島と一口に云へば、何だか外国へ洋航する様に、波濤の困難を予想して居る人が多い様だが、実際は其れと反対で決して困難でないのだ、却つて陸路函根、日光へ行くよりは容易だと思ふ、旅費なども確かに其れ程かゝらない、里数は明かに覚へないが、霊岸島を去る海上三十八里位で、今日の午後七時に霊岸島を出帆すれば、翌未明には夢を乗せて、早くも伊豆の伊東に現はるゝだ、此夜中の航路は暈の上にあるよりも楽で、窮屈な肢突き合はして屢々夢驚かざるゝ汽車の旅行よりは遥かに愉快だ、此伊東から大島へは海上僅かに八里半か九里足らずだが、此短かい距離が即ち関所とも云ふべき処で、人が躊躇するも此近い海上である、何と云つても相模灘を横断する訳だから、家に居る様な工合には行かぬ、それも風のない波の穏やかな時はいいが、風でも吹いて少し不漁気味でも催すと、随分鋸の様な波を見せらるゝ事がある、しかし其れも風さへ見計らへば却つて益する事もある、先づ伊東から大島へ帆船で渡るには北の風が尤もお誂へで、行くにも帰るにも至極便利で早い時は飛燕の如く、舳頭波を蹴つて僅々二時間にして到達するを得る、南の風は安全だが余り速力が充分でない、早くても七時間乃至八時間を要する、西の風に至つてハ、

絶対的不適当で、危険の怖がある、船は海の荒れない限りは大抵毎日出帆する、其他蒸汽船は三日目に一回、其れも小田原の荷揚げの都合で時々くるう事があるが、其れならば大安心でいと心持よく渡る事が出来る、即ち右は豆相の連山白扇倒懸の富士を眺め、渺茫たる太平洋の波濤を吹き送る潮風に左袖を払はれて、約三時間にして着するを得るのだ、此間の旅費は霊岸島より伊東迄九十銭、伊東より大島迄汽船なれば六十銭、和船なれば五十銭、他に少しの端艇賃を要するが其れは算するにも足りない、僕が霊岸島を出発したのが、とんよりと灰色に曇つた六月廿八日の晩七時半で、伊東に入港したのが翌日の午前五時前、未だ朝の光りが斜に冷たく浴びせかけた頃合だつた、蒸汽は本日既に出発したと云ふので仕方がないから和船で行く事とした、同廿九日の午後十二時丁度露を帯びた月が黒い波に輝いて居る、彼の山陽の天草灘上の吟を想はする良夜だつた、初めハ船頭に立つて吟声高らかに水を渡つが、二里余の沖に向つた時分、卒かに西風が起つて、見る見る中に激浪となり怒濤となり、小画家を乗せた一葉の軽舟は屢々此荒まく龍の鋭牙にかけられ様とした、元来余り船には威張れない僕の事だから初めの意気は何処へか去つて、末にはしだりもなく船底に眠つて殊勝にも神仏を便つて居た、かゝる有様で二日三晩続いたが、船子の操縦宜しきを得たのと、船体の構造が堅全であつたため、二日正午大島へ安着する事が出来たのは実に船夫等の責任を完ふした事を謝せねばならぬ、且つ自分の天佑を喜んだ、此処迄は案内記の様な者で、少しも香ばしくもなし又誰れでもやつた事で珍らしくもないが、これも大島旅行の道中だから一寸書いて置かう、

〔六月三日〕

正午船ハ大島新島村の波立てる汀に泊つた、打返しては寄する浪は、小さな郵便船を翻弄して、歳度か顛へさうてしたが、六十時間余の眩暈に疲れた自分はそんな事には少しも気を留めなかつた、それよりは只一秒時も疾く上陸が望まれたのだ、聽て島人の助力で船も安全に艫繩を縛へ、僕ハ船子の肩で砂の上に運ばれる事が出来た、其時破れる様な頭の痛みと、割る様な腹の苦痛は後で見て面白い美しいと思つた景色や、第一眼に非常な印象を与へねばならぬ島の婦人の風俗が、左程にも感じなかつた位で、寧らかな一酔よりハ他に慾はなかつた、船が着した時にハ已に宿やの客曳きが来て居たと見へて、早くも僕の行李其他の荷物を頭に載せて、軽々と傾斜のある凸凹した道を先に立つて案内した、僕も夢中で此女について、半丁程の所を辿つて宿やに行つた、此処が即ち大島三界で牛耳をとつて第一等と見做されて居る旅籠屋千代屋（ちいや）と云ふのである、新島村に向ふ者も出る者も最後迄目に残り最初に目に留まるのハ、海に面した側に黒い字で千代屋と大書してある白壁である、宿に着いて下駄を脱ぐが早いか、指された一室に駆け込んで、物をも云はず床にもぐつた、其後ハ翌朝迄全く前後不性で夢も見得なかつた、

僕が此日大島に初めて表はれた時ハ、三日余の船眩に顔色憔悴して蓬髮麻の如くに乱れ、雑巾代用の絵の具で汚れた稽古着を纏つた見るからに忌らしい装だつたから、内地人さへ折りにハ珍らしく見る島の女の目にハ、実に怪しく映したに違ひないのだ、孰れも僕の品定めに苦しんで、やれ泥棒だとか、やれ乞食だとか評議区々で、果ては島へ入るゝのも危ぶんで、中にハ宿やの女将に忠告した者さへあつたとか、女将も初めハ僕の宿泊に不賛成を称へたそうだが、着後彼の穢ないブルーズを脱いだので、漸やく安心して注意した近隣の人に訝かしい者でない事を伝へたと、居馴れてから笑ひ話をしたが、それは当然の事だろうと思ふ、

〔七月三日〕 晴天、

二三日来の苦しみで、今朝も頭の痛みは全く癒えず、尚波の響風のおとづれを聞いては、時々眩する様に覚えられて、思ひ切つて床を出る気にならなかつた、折柄女が来て郵便船が程なく出帆する由を伝へたので、さらばと匆ね出で、其れ其れ必要な所へ着報の端書を認めて女に托した、喫飯

後は台所に出張つて、先づ主人に当地の風俗人情等に就て精しき談を聞いて、今後の策戦計画を繞らした、女を頼んで大工を招き、寸方を示して杵を命し、午前中は兎や角くと時間を潰した、其中に昼飯の繕を運ばれたので、鯖の塩焼きに無器用な箸を動かした、給仕の任に当つたのは当家の嫁で、年の頃は廿六七の色黒い女だ、中々気前のいいお世辞の吐ける女で、何処から見ても朴訥な島生れとハ見へなかつたから、其の出生地を尋ねた処が、果せる哉生れは日本美人系の基点たる新潟で、東京に長く住んだ事があるのだと、聊か得意の容子、其れにしちや少し御面想が不足でならないが、今更棚卸しをした処が格別益もない事だから思ひ止まつた、却つて今後の製作画に影響する訳だ、此宿の部や数は彼是五つ間で、僕の陣取つた室は其中の最上等で、間も広く畳も新しい青物、西は総窓障子を排れば、浩漠たる万里の碧鏡を距て、相豆の畳障が長く浮び出で、白帆汽船の通航が居ながらにして見ゆるのだ、西北は同じ海続きで、層なつた山の間不二が根の秀嶺が幽かに聳へて居る、西南ハ新島渡島式根を初め、豆南の島嶼が水を距て、遥かに杳靄の裏に笑つて居る、東ハ椽付で青木が五六株茂つて、時は七月初めだから、一莖の白百合が首重さうに風に揺らいで居るのみだ、三原の山は此狭くるしい庭を夾んで、近く白い烟を吐いて居る、室は八畳で、一間の床には石板摺りの景文の鷺の図を掛け、有田焼らしいきまりきつた筒花瓶には、四季咲の薔薇が挿してある、承塵には小笠原君の描かれた三原の板寸が、粗末な椽に入れて飾られて、其横に白雲流水と太く書いた横額がつられてあるのだ、一体此部屋先の客は定まつて居たのだが、無理談判で僕が占領する事となつた、午後二三日前渡航して当家へ泊せられる小島と云ふ工業学校の生徒の訪問を享けて、茲に百日の知己となつた、お互ひに斯る僻島に閑散の身だから、学生の友を得たのを欽んだ、歳は廿三四の当世風の青年洒々たる風姿、大いに接し安い、聞けば矢張り贅沢旅行で、此四十日間を写真器と暮す積りだとか、夜は当主人の案内で小島君と三人近隣の女を訪問したが、皆きまりが悪い話がないので、早く帰つて来た、之れも策戦計画の端緒を講じた訳だ、帰つて又小島君と北国産の内儀に誘はれて銭湯に行つた、

〔七月四日〕快晴、

昨日小島君と三原登山を約して居たから、朝飯もそこそこに腰弁当、紺足袋、鞋掛けの足軽く、女に伴れられて宿を出た、初め当主人の話に三原山ハ此島の神霊として崇められて居て、猥りに常人の登山を憚つた処だから、道と云ふ道はなく、且つ険峻で平生馴れた者でも間々窮する事がある、況して初見の君等では到底困難は免れない、是非確かな案内人を召し給へと、勧められたが、なアに我々に限つてはと一笑に附して家を出た、されば昇り口迄なりとも道標をせんと態々女を送られたのである、途を西南に取つて、或露深い支れ道で女に別れた、其れからは兩人無茶あるき、何処でも構はず足に任せて語らひつゝ、只烟を目あてに分け入つた、歩一歩行くにつれて径は狭まり、坂路崎嶇雑草土を包んで偽路屢吾々を迷はした、日光は赤い光を頭から叩き付ける、空を吹く風は木の葉に遮られて只青い香を漂はす計りだ、二人とも着物を脱いで其れを背負い、薊荆棘に脚を搔かれながらも、勇往突進した、乍然時々二人の口から成程酷いな一の嘆息を漏らさざるを得なかつた、此辺一带桜、椿の林が大部分を占めて居る、これこそ大島の財源たるドル箱であつて、年々これに依つて経済が保たれて居るのだ、楞の木は路に跨つて時を得顔に花が咲き乱れて居る、節妙へなる春鶯の囀りハ、鞋下頭上に平和を唄ひ、静かに響く丁々の音ハ緑深い森を縫つて安逸を示して居る、此も四時間程で三原の頂旧噴火口の外廓に達した、こゝは俗に云ふ馬の背越とでも名付くる処で、大島半環を一瞬に聚めて居る海拔二千尺の山である、新島野増の里はコバルト色の森に押し付けられて、僅かに海岸線に集まつて赤紫の色を呈して居るのは、内地に見られない空気の色だろう、汀に蜿る糸の様な波は蛤ど全島を練つて居るかの様に思はれる、水平線の目よりも高く空に列つて模糊たる晴霞の中に白帆の微笑を漏らした不二の姿は、艶雅とも高壮とも尽さん辞がない、背

は三原の秀嶺所謂御神火で、是亦漸やく廢れた大島の人情を激せる源為朝の怨霊かと思はるゝ、万里の黒砂ハ天に沖し、播鉢の様な近時の噴火口は、兀乎と聳へて黄烟むらむらと湧き日月為めに光暗く、塊つては山となり、散じては龍となり、暫くも形を留めない、則ち前者は三百の長久咸く大平を唄ひし、東照公の治世に、後者は則ち雄鷲奇抜克く百万の兵を両袖に抛つた豊公に比して佳なりだ、

外廓を下つて焼けた砂礫に膝を没し、近時の噴火口に攀つた、硫黄臭い烟は五六丈の窟から糸車を引く様に湧上つて居る、其烟の中を囀々五六の燕が羽をかはして居るのは、是こそ秀家、為朝の霊を吊つて居るのであろう、どうやら腹もすいたからと行厨を解いて、梅干と握飯に舌鼓を鳴らした、小島君は写真器を叩かれる、僕は二三スケッチをして帰る事とした、今度は路を他に取つて、又々迷いながら山から廿丁余の処にある名物の湯場に立寄つた、こゝは大島島庁から特に設けられた者で、極く小やかな共同住居を立てゝ、地中から沸き出る蒸汽を利用して治湯に充てられてるのである、番人には夫婦と男の子が居て用意のない吾々の様な風来客を待ふのだ、今日は其番人たるお世辞のない媼一人居て、まづと座を勧めたので、型ばかりの部屋へ通り、出された駄菓子で茶を喫した、暫く休んで名物の蒸風呂なる物に浴したが、実に予想とは反対で、外は不揃ひな岩石で固め、四畳敷計りの窟穴の中途に格子を嵌め、下から噴出する熱い湯気で全身を暖む様になつて居るのだ、最初戸を排して首を入れて覗つた時は、濛々たる蒸汽に包まれて中は少しも見えず、奈落の底へでも這入る様な気がしたが、赤裸々奥に進んで格子の上に木枕した時には、早や馴れて初めの様でもなかつた、十分程も静臥して居る中に、総身の毛穴が弛んで五六年貯へた垢が汗と混じて泉の様に流れ出でた、人が喜ぶ程気持のいい者では決してない、しかし又これが此湯の特長で、一年の盆節季には島の女共は二日なり三日なり世帯道具を載いてやつて来るのだ、浴後又茶菓に酔つて高歌放吟、大いに相客を屁古ました、客は一人の書生と二人の娘で何れも新島村の人、即ち転地保養と洒れ込んだ訳だ、全くかゝる住居をこそ脱俗の境とも仙人の巻とも云ふので、三度の食は縦し露露松茎をくらはねど、毎日朝暮三原の烟に五体を注ぎ、風に拂はるゝ露の雫、井戸に溜つた雨水を呑んで居るのだ、況んや尚清光幽雅、頭に山裾に水をのぞむに至つては、隠士の居と云つても差支はない、四時半頃未だ干ききらぬ着物を纏ひ、再来を約し帰路についた、途中見し牛を牽く娘も、粗朶を戴いた媼も皆曲豊かな土地唄を口にして行く姿や声の美しさ、宿に着したのは六時十分で心配して居た宿の連中を烟に捲いた、夜はすき腹を抱へた飯で甘くかきこんで、小島君と又々海水に投じた、点灯後隣の女おとくさん色の白い一寸綺麗な伊東生れの女が来た、中々話せる人で年は十八九だろうと見える、屢々此前に引き出した宿の女は名をお松と云つて元来は東京産で七歳の時養女となつて此島へ来たのだ、爾来島の娘と風俗習慣に至る迄少しの離てもなく、孜々として家を営んで居るのは、島の人の評判のいい原因だろう、年は鬼も十七と云ふ女盛りだが、容貌は照介する必要を認めない、兩人僕の室に来て遅く迄遊んで居た、おとく君が帰つて後で聞けば年は廿五で立派な亭主のある人だと、さてもさても女の魔物と云ふ代名詞は免れない訳だ、

〔七月五日〕

何かに驚かされて、未だ寝足らないに床を出た、今日も昨日にまして好天気、雌雄の虎が首を並べた様な雲の峯が、紫の暮から忽然海のあなたに蹠つて居る、臆て目を擦すりながら、お松君の勧むる飯を俵たせて一枚を染めた、食後藤井氏（当大島の旦那様で為朝の後裔とか云ふ人、之れは近藤昂造君の照介を得て）に月見草の写生に行つた処が大失敗、月見草は落暉西海に呑まれて、涼風將に拂ふを俵つて開く者だと謂はれて見ると、自分のそこに気が付かなかつた事が、おかしい訳だ、仕方がないから宿に帰つて庭の白百合を板に描いた、未だ筆を執り初めて間もなく近隣の男女がどやどやとやつて来て、遠慮のない男は平気で座敷へ上つて黙つて見て居る、連中の中にはおとくさ

んも僕の好きなお米さんも居た、さすがに皆女だけあつて温なしいが、しまいには何時の間にか上りこんで色々と話をして居る、内地なれば其れ等の無礼を譴める処だが、これが内地と違つた所で即ち太平を唄つて居る習慣だろうと許して置いた、且つ或はモデルの材料を得る機会となる事もあるだろうと思つたから、其時理科大学院に居らるゝ木下季吉君、他に富士と云ふ人の訪問を受けた、此木下君は僕が伊東で一日大島通の船を待つて居た時海水浴場面で面識になつた人だ、暫時会談をして両君とも外出された、依然見物の客は入れ代り立ち替り踵を按して居た、村役場の書記郵便局の腰弁分署のサーベル、中には風透しがいゝので一寸昼寝して行く手合もある、話は何処も同じで大抵戦争の新聞の受売り話か、女の噂で持ち切りだ、宛るで人の座敷を倶楽部か何かの様に心得て居るのだ、由来大島は男女人口の差が非常に、殊に当新島村（又元村とも云ふ）は甚だしいのだ、概して内地でも海岸線には此傾きを間々見聞する事だが、大島の男は誠の厄介物で、只子孫殖産の責任を以て自らゆるして居るので、いつも将棋カルタに永い日を伸氣に送つて、女の貯へ高を徒費するのである、此に反して女は星の朝から星の夜迄、骨を惜まず働いて居る、荷物を運搬するのも、山に薪伐るのも、牛を逐ふのも田や畑を耕すのも悉皆女の勉で、勿論家政から裁縫料理悉く女の手で弁じるのだ、之の習慣は全体を通じてではないが、兎に角男の意気地なさは証明するに足る、せめて此女の仕事を一目でも東京の深窓に育つた暖衣美食に飽きた姫御前方、且つは男女同権女尊男卑を口にして居るハイカラ海老茶に見せてやりたい者だ、夕方になつて少し腹加減に不足を感じて来ると現金な者で、皆云合した様に散じ去つた、

日は已に黄色い固い海の背に沈んだ時分、斜向なるお米さんの牛小屋に画架を据えた、之れは今度の作画の背景にする積りで、

夜小島君木下富士君等車座に桃を齧りながら都の話しに時を過して、九時頃から小島君と西の銭湯に行つて、女計りの中に暴れ込んだ、帰りには手拭肩に放歌の姿可笑しく犬に吠えられ、姿扮つす天上の女星に興を添ゆる野郎となつた、



(写真1)「大島婦人」『L.S.』No.2 より

三蔵法師「大島日記（二）」『L.S.』No.2（1905年8月26日）

〔六月六日〕快晴。

八時起床、今日も昨日に譲らぬ好天気窓外の眺め又一段、何時も代らぬ鯖の膳を終へて当もなく外出した、昨日迄僕を不番で迎へた男女も今日は漸やく馴れた者と見へて、宿の近くにすむ連中は殊勝にも甚だ不作法な挨拶をする様になつた、今しも伊東から来た郵便船は幾度か風濤に洗い晒されて色の褪めたる干章の旗を水に流して疲れた乗客を卸す最中であつた、船客の中にハ初渡の人も居て物珍かしさうにあたりを見回して居る、陸に居る女子供は勿論海岸に面した家人は、孰れも不思議気に船客を眺めて居る、内地人の僕でさへ一人宛舟士の肩で運ばるゝ上客を物新しく見るのである、丁度僕が渡島の當時を観察する材料で、しかも其時の僕の怪げな風俗は之れに比して決して島人に満足を与ふる事の出来なかつたのは無理ならぬ事である、運搬に従事せる婦人は殊更に意を留めぬ者の如く黒衣着物に黒い襦袢の装も質素に五斗入の米俵を載いていとも軽々しげに腰に繰りつゝ、小石の斜道を微声にすさび行く形の彼等には苦の何物たるを解せないかの如くに考へらるゝ、又貴賤貧富の等級を認めぬかの様である、或は西の巖上に或は東の樹下に空想半分の画趣を探りつゝ野増村に面せる海浜に倚んだ時に遇々隣家の婦人が来た、曾ねて同婦人にモデルとして適當の娘ある由を聞きし故、此期逸す可からずと短刀直入議案を提出した、婦人は快諾したが兎も角も御一覽の上にと約束して分れた、平生の無遠慮直角的行為は不計も敵を制して大半の効果を奏した訳で、恰も飢饉年の洪水を得し其れにも似て、不思乱髪の鬼面の相貌も慈悲愛敬の地藏尊容を呈した、

午後一時頃約束通りモデルお春ハ愧かしげに母に尾いて来た、十四と云へど身丈は十五六にも延び姿勢は島婦人の特長で些の申分なく、殊に面容の可憐にして露ばかりも憎気を見せぬ温和な風は内地でハ到底僕輩のモデルたる可き者でない、さまり悪がるのも構はず早速ながら、せめては是れでもと母なる人の着せた内地出来の縞織を解かせ島専用の麻織浅黄紋付に代へさせメリンスの華やかな前掛を紺にせしめて新しい素麺絞りに鋼鉄の様な光沢の滴たる投島田を纏ひ房を飾つた綺麗な襟を和らに結び、予め胸中に像いた姿勢をとらした、処が此女最初から普通ならぬおほこ娘と見へて、母に伴れられて来てから始終母の腰のあたりに纏つて居て、少も面を出さない、のみならず僕と兎島君が余り巧くもない世辞を振りまいて慰めんと試みたが一向に其効挙らず、十言に一言の床しいお言葉さへ耳にする事が出来なかつた、執筆中も休憩時間には直ちに椽側の障子の陰に潜んで呼吸をさへ気支つて居る様子だ、此れも初な娘の持前と使用方にも充分匙加減をして、先づ初めは十分間位として馴るゝにつれて僅かの時間を増したが沈黙はいよいよ沈黙で、殊に多くを語る僕にも只時々「ハイ」の響しか給はらなかつた、其他は只愧かしそうな可愛い笑を添へて首をふるのであつた、かくして五六度を繰返して居る中に日も傾いたから再来を固く言ひふくめて歸した、

夕景からは昨日から画き出したお米の牛小やに懸つた夕飯も皆に後れて済まし冷たい風にふかれながら烟をふかして居る中に母屋の前椽に二三の女連が集つて潮と烟で煉つた高調な飾気なき玲瓏の音に節も圓かな地唄を合唱し初めた、庭を隔てた四人の都男は自らなる糸の唱に引きたぐられ、しばし恍惚として無林の境に入つたが……

お江戸見たさに早起きすれば

お江戸見せない霧の雨

わたしや大島の御神火育ち

胸にや烟か絶へやせぬ

男達なら千ヶ崎沖の

潮の早いを留めて見よ

躑躅椿は野山を照らす

様の美船は灘照らす

喫いかけた巻煙草の灰が露をのせた植木鉢に散つて、
ジー、

〔七月七日〕快晴。

昨日から描き続けたモデルお春に夢醒されて、飯も勿々画布に対つた、昨日散ざ僕等をぢらしたお春つ子、口を利かない事は昨の通りで只不相変椽側にもぢもぢして居る、気の毒でもあり、可愛そうでもあるから余り暖くもない懐を割いて口に合ふ駄菓子を進めたが聊かの利目がない、寧ろますます尻込みする計りだ。其れも其管内地なれば未だ十四と云へば人半分で蝦茶の袴着て竹の台の運動会に片言交りの唱歌や不器用なダンスにうかれ廻つて、中には男女の区別さへ出来ないお転婆娘のある年だが此土地で十四五にもなれば已に立派な女一疋、しかも放浪男の一口位片腕で糊する事を得る腕前があるのだ、従つて外も内も早熟で、内地娘の知らない情さへ発養されて居るのである、其青春香を漲らさん計りの女を、馴れもしない宿やの座敷に据へ込み、回りの障子さへ堅く閉ざし、何処の馬の骨とも鬼の首とも知れない、ブルーズ姿に散髪恐ろしき筑紫荒男の睨目に瞞まれ、尚傍には底の知れない児島君の眼光、顔の大半を青い剃髭で埋めた富士君、木乃伊よりも骨つばい漆色の木下君の顔、之等の揃いも揃つた一癖ある手合が傍目もふらず、動かば骨迄も嘗めん勢で八ツの眼光は絶へずお春の頭から足迄射透すが如く浴びせかゝるのだから溜らない、倭さふ女なれば疑り固まる所だ、之れでは到底ものを喰ふの沙汰ではあるまいし又勿論談しも出来る筈の者ではない、乍然僕の操縦法が大ひて宜しきを得たか、或は他にモデルをして悦ばした材料があつたかは知らないが兎も角も一通りならず愧らふ中にも常に不満の風情は見せなかつたので。

こんな風で居たら立つたりして、画には何の不足もなく一日を暮した。(勿論出来は少しも振はず)

室内の作画中には左程の必要を感じぬ太陽も、落暉光納つて西壇に包まる、時には何事も捨て、牛小やに走せ付ける、牛小やは海に面した黒い石垣の上にあつて不揃な板で囲われてあるが、此の小やの主権者は赤白斑の牝牛で此亦当地の重要物産の一である、同じ女でも、人間と違つて大島に生れたのが非常な幸福だ、廿四時何の仕事と云つてはなく只此小やに起居して釘付にされた板囲のすき間から、水に浴する日を見ては起き山に転ぶ月を見てハ寝ね、専ら子孫繁殖の責任をさへ全ふすれば事が足りるのである、小やに並び立てる、玉椿ハ翠高く延びて、丹くやけた空の反射を堅い葉に享けて居る。

バルミリオンとブラック臭い十二号漸やく完つた、此絵の写生中二日目にお米の母が態々昼の間に牛小やの修繕をして得意になられたのハ失敗談の一つ。木下君と富士君はモデル見物にも飽られた者か、それとも気を利かされた者か宿の魚籠と竿を用意して出て行かれたが間もなく大きな得物を齎らされたのハ恐れ入つたお手柄だ、之れも島人の性をうけて釣られた方がのろかつたのかも知れない。

夜おちねと呼ぶ全島で唄の名手、且つ曾つて三原の烟と併せて唄はれた一昔の美人が矢張不遠慮にやつて来た、厨房でハ老婆と按摩の議論が起つて今や滔々の弁に聴者を捲き去らん勢、面白ければ、台所に進んで暫時警世痛快の語に耳傾けた、按摩名ハ遊仙眼なき不具者、幼少にして按摩鍼灸の術を学び尚東京に遊んで杉山流を修めた人、一種の慷慨家である、いつも氏の得意とする耶蘇教全廢論は折しも雄弁叱咤に論じられて居る最中であつた、彼を難じ此を説き談はたまたま神事に移つた、処が不具者の憐れさは自然神仏に倚頼するものと見へて、神や仏の事には心迄目がないのである、且神仏の靈験を真地目腐つて説き突唇可笑しく病難の祈祷はかく、火難の祈祷ハかく、戦捷の祈祷は爾々と得意の譚、其中で面白いのは、天狗の一件で目下日露百万の貔貅数百の艤艦は満野東海に鮮血を濺ぎ、しかも皇旗の翻る処、敵軍朝を杜す所為の者ハ勿論邦軍精英の然らしむる処な

るも又他に日本特有の神護の致す者莫大なり、即ち上は伊勢大神宮より下ハ鞍馬天狗秋葉天狗より木葉天狗に至る迄親しく軍を援けて賊を破るのであると霓の如き気焔に四筵孰れも啞然たる計りだ、其処で僕ハ一体天狗は唯れにでも姿を見得る者かと反問すれば戦争さへ済めバ又天狗の同勢は渡還してそれぞれ本職に復する者である、乍然倒底俗魂に染んだ輩には目のあたり接する事は出来ない、天狗と云ふ者は一種の魔物で常に空中を飛進して下界の人為を監視し之れに賞罰を与へ、時に旋風に御して深山溪谷に下来するものだ、矢張り灰色の大羽翼を備へて居るが、凡人でも或は音を聞く事を得る、其音とはと問へば、其れは鳴声にて森林幽所を過ぐる時、風のまにまに、ピーピーと響くあれこそ天狗様の方色で、つまり雷電の中に棲む雷獣と同じ訳の者だと、語り去つて沾として恥ぢない、一座洪笑、幼少の折古老に諭された戒説を飽く迄記憶して、しかも盲人の直根情に深く信じて動かさないのであろうが、お可笑とも気の毒とも滑稽の極みだ。

夏の夜の短かさは已に十一時を報じた尚話し続ける言葉を捨て、床にもぐつた、夕立後の空は飽く迄冴へかへつて、演劇の様な星の団欒が羨やましい、台所では遊仙君の祈祷の独唱が手に取る様に地に響く。

〔七月八日〕 風雨。

モデルお春の下絵が完つたが、光線の不充分と、モデルの不馴れと、大切な技術がないので遂に拙劣に終つた、縦し、光線の不満、モデルの不熟練、技術の不足はあるとも、此地に於ける自惚を捨て、始終を探れば、左程の失敗は見ざりし者と今に至つて想ひ及ばすのである。

※「大島日記（下）」の冒頭の文章の日付が〔六月六日〕と原文でも記されているが〔七月六日〕であると思われる。

以上が和田の大島滞在の記録であるが、大島と美術家たちの関わりについて詳しい藤井虎雄氏の記述によると、三造が定宿としていた大島元村の千代屋にはサイン入りの絵があり、元村吉谷神社例大祭に掲げる「三原大明神」の幟旗の三造による文字もあったが、大火で燃えてしまったという。また、興味深いのはこれも藤井の紹介している『島の新聞』1935年11月10日号の「島と恋—アカファン画伯（上）」という記事である。1904年の夏に陸軍大将の息子（記事内では太田氏と称されているが大久保春野の子息・健児のことであろう）と2人で大島に遊びに来た「アカファン」と呼ばれる渡辺市道という美術学校の生徒を主人公にした内容である。この青年が記事掲載当時では洋画壇の第一人者として推しも推されもしない帝展審査員とされており、明らかに和田三造のことを言っていることがわかる。赤い禪をつけているから文字通り「アカファン」なのであるが、これについては三造とともに白馬会の研究所で学んだ町田曲江（1879～1967）が1921年12月の『中央美術』に記した「和田の赤禪」という文章にも印象的に描かれている。町田は「何か和田のことを思ふと、きつと其赤禪が目の前にちらつく」とまで記しているほど禪が臉に焼き付いていたという。頭をクルクル坊主にそって麻の衣に白い小倉の袴をはき、下駄に日傘をさしてさも強そうな格好をして歩くようなところが三造にはあり、髪を伸ばしてから洋服に平気で下駄履きであった。赤禪は白馬会の研究会で同窓会をしたときに三造がハイトリ踊りというのをやったときに披露されたともいう。赤フンドシで語ることのできる人物というのもそうはいないだろう。

話を戻すと、「島と恋—アカファン画伯（上）」ではそのアカファンが大島でロマンスをつくろうと、油店のおやすさんに懸想するという話である。続編が確認できないのは残念であるが、青春時代の三造の姿が少しずつ明らかになるとともに、後年の三造の創作活動にも彼の性格が大きく影響しているようにも思われ、興味深い。

2. 「堅い牡丹餅で頬を殴られたやう」

続いて「南風」で第1回文部省美術展覧会二等賞を受賞した時の三造の談話を紹介する。

「堅い牡丹餅で頬を殴られたやう」（授賞画家和田三造氏の談）『絵画叢誌』248号（1907年12月）

文部省展覧会西洋画にて独り第二等賞の月桂冠を得た和田三造氏を永田町の仮寓に訪ふ、綿緋の羽織に白小倉の袴を着けた氏は曰く、イヤ只今引移つた計りで今迄は向ふの酒屋の二階に居つたのですイエ名誉でしたうが、何だか堅い牡丹餅で頬ペタを殴られたやうで気味が悪るいのです、斯ふ責任を負ふては将来が困ります、歳ですか厄年（二十五）で余り若くて恥しいから歳は云ひませぬ昨夜（八日）は文部大臣の招待で帝国ホテルへ行つたが、イヤハヤ大苦しみコンな目に逢つたのは産れて初めて、私は御覧の通りの日本服で従来洋服と云ふものを着たことがない、当夜も此儘で行く積りでしたが先生（黒田清輝氏）の絶つての勧めで洋服の借着です、普通なら学生服から背広、フロックコートとなるのですが、一足飛びにフロックコートで、頭の天辺より足の爪先迄一切借物で殆ど滑稽を尽したは善いが、靴が小さくて痛いには非常に弱りました、で当夜は其痛さにのみ感じて夢中な位、又弱つたのはパンです、私はパンが大嫌な所へ来てナイフやフホークが碌に持てないのです食卓は隣りが小山正太郎君、向ふが中村不折君で私は幸ひ角であつたのは遠慮は入らない手で引きちぎつて肉を食べたのです凡そんな苦しい記念はありますまい文部大臣は私の大島行きに就て御尋ねもありましたが私が今回の文部省展覧会へ出品した「南風」と題する作は相模湾から大島を觀た写生で、これに就ては大苦心をしました、去三十七年から今春に掛けて四度大島へ航行して写生したか此島程景色がよく変化に富む所はないと思ひます、元來船が嫌ひであるが一度此の風光に接しては恍惚として夢寐にも忘るゝことが出来ず、四度も航したが、此間に非常な難風にも逢ひ漂流をもしました此の「南風」は実に此の漂流より得た賜物で相模湾から下田迄に吹き流れた間に得も言われぬ風景を印し、終に七箇月を費やして成つたのです、図中の船頭は私が同船したもので、船中の實際から船頭の船中に於ける位地から何迄一々此の本人に質して画いたものです、で船頭とは非常に懇意となり又親切な奴で之が為めに態々此宅迄来て呉れました、だが中々の矢筈敷屋で、実形其儘では絵にならないから少し事実に違へるとプンプン怒り出す始末、図中船頭の頭に被れるものが南風に吹かれて後から顔へかゝる所などは實際では如何にも物にならないと云ふと、それではウソを画くのだと怒鳴るのです、畢竟親切から来るので寧ろ謝さねばならぬのです

3. 「画家の其の邸宅」

上記の記事とそれほど時を隔てずに取材されたと思われる、画家の家を訪ねる特集記事を紹介しよう。これは中村不折、川端玉章と三造の先生でもある黒田清輝、そして三造の住みかを記者が訪問している。ここでは三造の家を訪問する部分のみ取り上げるが、記者は日本画家の川端玉章の家についてはその俗悪さを批判的にとりあげ、辛口の意見を記したが、その反面三造の住居についてはかなり好意的に感じていたようである。

おれんぢ「画家の其の邸宅」『日本及日本人』482号 1908年

「中村不折氏と、黒田清輝氏と、川端玉章氏と、和田三造氏は、今の画界の一面を代表する人々である、不折氏は太平洋画会を代表し、清輝氏は白馬会を代表し、玉章氏は日本画を代表し、三造氏は、之から起らんとする、新氣運の活動を、「南風」の大作に具象した画家である。（中略）▲和

田三造氏を見舞つて驚いた、昨日「南風」が二等賞になつたと云ふ其の今日だ、三造と云ふ人は、どんな立派な家に棲んで居る事かと行つて見た、教へられた名刺を辿ると、麹町華族女学校裏に当るが其番地はあるが和田と云ふ名刺は無い、偕不思議だ哩と、其処に居た御神さんに聞いて見ると、あの画書きさんですかと云ふ、さうですと答へると、では其人は此家の二階に居ると聞いて少し驚いた、格子を開けると朴の木やら山桐やらの下駄が一杯、つまり和田君は、人の家の二階の仮住居の身分なのだ、コルシカの一小島からは、世界の豪傑ナポレオンが出で、北米の一木舎からリンコンが出て、華族女学校裏の酒屋の二階から、博覧会の二等賞か飛び出した。汚ない八畳敷の二階の一間に、若い画家が七八人固まつて話をして居る、未来のターナーも居やう、ベックリンも居やう、其中で小太りした、黒木綿の紋付き羽織に、小倉らしい画家袴を穿いた、二十七八の青年が、私が和田三造ですと云ふ、二度吃驚した、唯だ身体の至極丈夫さうな、血色の好い顔と、元気の好い声を見て、成程これだからあんな元気の好い画も出たのだなと首肯れる、聞けば今日は、工場の図に、活動の表象を描かうと熱心であるとか、メンツエルにもこんな絵はある、真に元気の好い、活動の気に溢れた絵画は、此様な身なりも構はぬ、陋屋に家借りをしてる青年画家から出ねばならぬものだと思つた。(後略)」

4. 「巴里より」および鬼木萬次郎宛書簡

文展で2回連続して最高賞を受賞し、官費留学の榮譽を受けた三造は1909年4月に欧州へと旅立つ。この留学時代に三造がどこへ行き、何を見、どのような作品を制作したのかは、残存する作品も資料も少なく、わかっていることが少ない。その中ではパリより日本に寄せて記されたこの記事は貴重なものである。鬼木萬次郎宛書簡については1979年に北九州市立美術館で開催された『和田三造展』図録より転載させていただいた。図録によると1911年頃にスイスから鬼木に送られたものという。これは三造の親友に送られた私的な書簡であるため、雑誌記事以上に飾りのない当時の三造の考えが表れているものと思われ、重要な資料である。

『白刀』1910年11月 白刀社

三造「巴里より」

暑気漸く相加はり申候処幸に御地にては何の雨気もなく気候も暑からず春か夏か一向に合点行かぬ位の寒にて公園川端等に列をなせる画架を見受け申候、小生に於ても不相変頑健呑乎の酒蛙としてブラを發輝^(マツ)致居候、着して已に廿日以上^(マツ)の今日何の得る事もなく消光致候小生は先週より腕(瘦)を擦り目を洗ひ初めて毛色の変つた人種を相手に小手調べに御座候無論二十五号位の小さき稽古物も御座候処が矢張り蛙は蛙にていくら処は変つてもひる屁は同じ分子に御座候、こは無論にて決して牛肉の屁が香ばしくも思はれず候、只伊太利の老モデルの貧に飽きし煩の骨怒り日鼻大に斑鬚豊かなるに對しては曾て起らぬ感じを生じ申候、殊に隣室の「ピアノ」を吹き送る風に於てや、新緑漸やく精に入りし巴里の都の此頃は彼処此所に湧くが如き紅塵を他見に美術展覧会の錦なす自由の主義を展開せしも心地よく候、こゝに罷り出でたる野老三造生は此等名作を見ばやと毎日足を運び後れながら臍の緒をメめ寶丹持参で罷り申候、成程巴里は巴里、聞きしに劣らぬ腕揃にてとても小生の筆にては御紹介申す事は叶はず候唯皆勉強努力の結果なるを信じ申候殊に其等美術品の飾られたる開場のいづれも宏大に美麗に善美を尽せるは羨しく且つは市街の向ふ所美術の数多きを一々丁寧^(マツ)に保護する当局者の心根嬉しく感じ候これなれば美術家も骨折甲斐があると存候、かゝることの半分でも日本で真似すれば結構なる事と考へ申候、小生は此等数多の展覧会場に入り種々新しき感

じを得申候其中分けて確信致候は当時佛国画界の状態は実に混乱時代自由放浪時代とも云ふべきものにて、其中自ら潮流の沸騰せるを發見仕候、或は堅実なる、或は朦朧たる或は色に酔ひし或は想を楽しむ或は奇を衒ふ或は無暗に古に親しむ者各自己を發輝^(ママ)して余りあり候、此中小生をして點頭せしむる者も、眉をひそめしむる者も又不思議を號^(ママ)ばしむる者も有之候、目下当地に留学せる各国の美術学生の以上諸潮流に依て大に技を進め想を練る者と反して天稟ある才能を塗沫し邪道に身を危くする者の二種あるを信じ申候、小生等も無論此點に於て常に自ら警戒せざる可からざるを覚悟致候、然し乍ら以上の諸流中大家と云はれ優作と称せらるゝ者に至りては其目的も辿るの道は同様にして或る岐路に來りて各便宜なる徑路を自ら發見して進む者なる事は確にて曾て小生等諸兄と共に研究せるの正道なる事を信ずると共に黒田師之指導の最も歩み安くして危険少なきを思ひ八九年師に於て得し賜の貴重なるを感謝し喜び申候、若し小生等にして若し当地に來り百鬼夜行の巷に迷ふ事ありしなら必ずや是等悪魔の餌になりたりしやも不計と存じ候、即ち日本に於ても猶研究の余地の綽々たるを敢て明言仕候、否却て其安全なるを明言仕候、黒田師に依てなされたる燈明は艦を港に入るべき迢徑にて徒らに粗漏に過ぎたる色彩派の欠点なり徒らに無味無趣に過ぎたるアカデミー派の欠点を去りたる尤も堅実なる尤も甘きソップの滴なるを、諸兄疑ふ処なく益々喰ひ飲み充分鼓優して佳なるを勧めて不止候、乍然以後小生が向ふべき取る可き道の師を追慕する者なるや否やは不知ざれど常に相顧るの処は師の指呼に外ならず候、随分研究所同窓諸兄の内にも若くして遙かに巴里の夢に憧れ居る方も有之可くと存候がそが決して莫大の利益なきを切に確信仕候儀に付き以上の人及び迷へる人に小生が俾見御伝へ被下度候決して人を慰めんが為めの根拠無き意見とは吾ながら思はず聊か同窓諸兄への老婆心にかられし次第に候、此の感想は小生の一昨日強く刺撃する者に御座候、無論是れとて程度問題にて或る程度發達せし士の其上の研究を遂げん為めが当地へ知られしは至極結構な事と存じ候、以上俾見の無理ならぬを聞き賜はこそ満足に存候、白馬会展覧会も諸兄の御尽力に依て見事に開会されし由嬉しく存候、研究所其他の事項にして面白き事も候はゞ何卒御指導願度候。匆々蕭々たる梅雨ガラスを包みし中質素なる諸兄が面白く筆取り面白く語らふ様目に浮びなつかしく思ひ出で候。

鬼木萬次郎書簡より

……吹起こる蘭麝ならぬ田舎の風に誘われて僕は先月二十九日巴里を出発、当州の最頂点、湖水溢れて瀧津瀬をならし、枯木山の屏風の影に羊飼う賤の女の鄙唄に終日を暮らすながらもなき生涯を送っている。家は湖畔に立つホテル一軒にて、而も客は僕一人、聞くものとは鳴る瀧の音、重き牛車の響き、鳥を俱に、犬を伴に終日を湖畔芦繁る処幽玄の森、千古の人ささやく中に画笔をとっている。僕の一年來の研究更に何の得るなし。何のあとなし、サロン出品にとてやりかけた大作は途中放棄して寝台の下にうずたかし、しかし只謝する事は、僕の己れを知り得しと、絵ということの何たるかを略解せしにて、此賜は行く行く前途に迷なからしむることなるを思いて喜ぶ、即ち僕の僕を知りしものは、僕は日本人なり。しかして其二千年來の美術思想は我血にあることを悟りしにて、絵といふものの意気は、人によつて作らるるものにて、決して器械で出来ぬこと、又熟練のみでなすものでない事を解釈した。無論僕のこの意義を悟らしめたのは巴里に集まる数多の美術品であるが、僕は今後大いに之れに依つて進む積りなり。そして此の意義の誤解なりしを知れば直に翻つて他に向わんのみ。只君に所言して置くが、僕が今後の作品の必ずや帰朝後に世の罵詈はんせきに會うて、曾て洋行前聊かもて囃されし名を泥土に委ねることで、君は此際決してがっかりしない様に、又僕に不服を言わない様に徐ろに進む僕を楽観して居て貰いたい。之れ等に就て君にはもっといろいろ言いたい事があるがとても手紙では言えぬ。又口でも言いあらわせぬ、只僕の帰

朝後、君に示す者に依て案じて貰うのみだ。橋本邦助六月一日巴里に着く筈、彼の単身自費の渡欧は洋画界に響を与えること、僕の見習わねばならぬ事だが、僕には到底駄目、兎に角彼らと巴里に手をとるの日の近きをまちこがれて居る。・・・

三宅克己己にマルセーユの辺にありとか、未だ不会、久米師は英国に、いずれ巴里に見えらる可し、僕は日英博覧会には行かず、何だかお祭さわぎ見た様なのはいやだから。

5. 「帰朝雑話」

定められた3年の留学期間を終えても三造は日本へ帰国せず、関係者から資金的な援助を受けながら滞在を伸ばす。ようやく日本へ戻ろうとして立ち寄ったアジアに魅了されてシンガポール、インドネシア、インドなどに滞在した。結局帰国したのは出発から6年を経た1915年3月のことであった。次の記事は三造の留学がどのようなものであったのか端的に知ることのできる興味深い内容になっている。

一記者「帰朝雑話 和田三造を訪ふ」『美術新報』14巻7号（1915年5月）

明治四十二年春、欧州留学の途に上り、一昨年暮、巴里を出で、印度に立寄り、外遊約七年、帰来の遅きに、益期待せられつゝありたる、和田三造画伯は、三月下旬帰朝した。

一日麻布高樹町の新居に氏を訪ふ、磊落なる氏は、頗る社交的修練を経来つて、快潤なる態度で語つた。

氏は巴里に居を定めて、伊太里其他欧州の諸国を巡遊したのであつたが、深く緬甸印度地方に興味を覚え、滞留年余に及んだ、今度、外父の訃と令室の重症の報とに接して急遽帰朝したので、今秋再び印度に旅する筈ださうである。

『西洋の事は、すっかり忘れまして、矢張り東洋の方が面白いですな』と氏は言ふ。『印度では一歩外へ出ると、総ての風俗なり習慣なりが、古い古い昔からの系統の様で、我々の祖先の面影に接する様な気持で面白い。西洋では風俗や習慣に就ては格別面白いとは思ひませんがね、印度では総てのことが、清く々々しやうとして来たものゝ様で、何か意味のあることの様に思はれて興味を覚えるのです。非常に迷信の強いところで、印度の人は拜むことが非常に好きで、拜まずには居られぬ様ですね、或処では、女が泥をこねて小さな人形の様な仏像を作つて、それが出来ると、自分で造つたそれを頻りに拜んで居るのを見たことがあります、何か因縁があるのでせう。信仰と崇拜と云ふことが、印度の生活からは、取り除けることが出来ない様です』。

床の前の壁に厨子の扉の破片の様なものゝ立て掛けてある。唐草模様の中央の踊り子の様な形が薄肉に彫られてある。何か仏の眷属かとも思れるが、それは緬甸の女の風俗ださうである。其姿致が頗るよい。心持のよいものである。乾漆で、かなり年代もありさうに思はれる。氏が緬甸で得たので大な箱であつたのを、不便なので壊はして持つて来たのださうである。日本で云へば奈良朝以前の遺品とも見られるものである。

氏は緬甸の内地を数箇月旅行して、多少写生を試みたさうであるが、或時上衣を盗まれて、其中に入れて居た写生帖と旅費を悉く失つた。『其時は非常に困つて居た時で、写生帖よりも、金が惜しいと思ひましたが、今から思ふと、折角苦辛を経て写したのだから、写生帖が惜しいと思ひます、再び行くことが出来ぬのですから』と氏は云ふ。

氏の敷いて居る座布団の更紗が眼に付いて、記者が頻りに推賞したので、氏が土産に持つて帰つた更紗の幾枚かを示された。瓜哇のジョクジャの本場の更紗であるから、其染色や型模様の面白さ。

近頃は盛に独逸人の模造した安物が輸入せられて居るそうであるが、本場の物は洗へば洗ふ程、色が鮮かになつて久しきに耐へると、模様面白味はとても模造品の及び得ざるところであるさうだ。その真贋を鑑別するには一々匂ひを嗅ぎ分けるのださうである。染料の匂いで区別するのであらう。

それから印度の玩具や小偶像など数々取り出されたうちに、三寸ばかりの柔かな石に彫られた半肉の小仏像に、印度式の、特に其女体には、乳の膨らみや胴のひねりに、彼の肉感的な印度の気持が遺憾なく現はされて居る。無雑作な刀痕に、侮るべからざる冴えがある。そして些の銜気のないところに、愛すべき芸術味の萌芽が潜んで居る。

氏が印度の内地を旅行中に、或宿屋の室内で、高い壁の処に掛けてある絵が目に留つた。そのブリミティブな気持が気に入つたので、聞いて見ると、それはカリガートの社の前で売つて居ると云ふ、そこで氏はカリガートの社に詣で、十数葉を買つて来たと言つて出して示された。頗る面白いものである、其二葉を借りて原色版として本号に掲げた。勿論それは尊貴なる芸術品としてゝはないけれども今人が強いて原始的ならんとするが如き銜気がないので、気持のよいものである。

カリガートはシヴ神の妃で、血を見ることを好む神で、社の前では日々数十頭の羊を屠るので、血腥ぐさい気持がする。その社の前にその絵を描いて売つて居るので、十枚僅に四銭の絵である、お守り札の様なものである、『其ア、チストにも会いましたがね、極無雑作にかいて居ますよ。併し丸みのつけ方や、顔の形なんかもよく出来てるぢやありませんか、今の新しい人達が苦しんでやらうとして居るところを、自由に面白くやつて居るぢやありませんか』と氏は云ふ。記者は同感の意を表す。やがて氏は起つて、一枚の皿を持ち出して『新しい派の人々のものがき苦しんで居るところも、つまり此位のところだと云ふことも近頃分つて来ました』と云ふ。ロートの絵を描いた飾皿である。赤や黄や紫の線で描いた絵である。『散々苦んで、十枚四銭の絵にも及ばぬものを描くと云ふことが芸術の真理であるならば、我々は絵をかくことを止めた方がよいと思ふ』、と氏は笑ひながら言う。

『勿論新しい運動が起つていろいろ変化を試みることは何等かの結果を生ずるのであらうし、又何等かの効果を齎らすであらうから、其点は決して咎むべきではないが、唯新しいからと云つて、直ぐ真似をするのはつまらぬ事である。新しい率先者のマッチスなどは迷つて居るのである、その迷つて居るのを真似すると聞いたなら、マッチスも泣くであらう。西洋と日本とは立場が異がう。西洋では昔から真と云ふものを求め求めて来た長い歴史と、嚴重に規則づくめに研究を積んで来た伝統があつて、彼地の画家は、もう行きつまつて了つてその重荷に堪えず、窮屈でたまらぬので、在来の伝統を擺脫して新しい試をしたいと云つて、迷ふて居るので、それは無理もない事である。日本はそれとは全然逆な経歴を踏んで来て居ることを忘れてはならぬ』と氏は言ふ。

『此程も或若い画家達と逢つたが、理屈は中々盛んである。併し理屈はつまらぬと思ふ、人を殺しても理屈はつけられるのだから。若し言ふべき理屈があれば画が言つて居るんだから。それに理屈が盛んな割に、推し詰めて見ると、矢張り迷つて居るのだ。それも其筈で、そう新しく新しくと云つたところで、西洋にだつて新しい大家の種はそう沢山にないのだから。サロンドウトンヌなぞも年々変つた絵が出なくなるのを見て、そう変つたことばかり出来るものではないだらう』と、氏は又言ふ。

『西洋の風潮を無闇に真似ると云ふことは不真面目だと思ふ。年々豹変して行くと云ふのも不真面目だと思ふ。それに太平洋画会を見ても、巽画会を見ても、どれもこれも一人の人が画いたかと思はれる様に一様に見えるのは不思議だ。中には少し変つて居るかと思つて見ると、矢張り西洋の模倣で、独創があるのではない』と、氏は語る。

『彼地では極く新しい派の人達が、老大家の絵を見て、「いゝなあ」と言つて熟視して居るのを見たことがある。技術の上では矢張り及ばぬところのあるのを自覚して居る。旧くても佳いところ

は受容れるだけの雅量を有つて居る。日本では無闇に先輩や老大家をけなすのは醜い。氏は我邦現下の画界の風潮の軽佻にして真面目でないのを慨きつゝ、そう言つた。記者は氏がその齎らした、外遊中の製作の早く展観せられん事と、氏が現下の我芸苑の期待に報ゆるべく、大に自重せんことを望んで、辞して帰つた。(文責在記者)

6. 『『晩帰』『南風』の頃』

ここで紹介するのは三造が初期の活動について後年に語つた話である。20年もの時が経つた後の回想であるため、細かい部分では相違があるが、白馬会賞を受けた「牧場の晩帰」や「南風」の制作の経緯も記され、重要な情報が示されている。



(写真2)「牧場の晩帰」第10回白馬会展(1905年)出品

和田三造「出世作の頃 4 『晩帰』『南風』の頃』『アトリエ』5巻8号(1928年8月)

僕の出世作は「南風」よりも寧ろ其の前年の白馬賞を貰つた「晩帰」だらうと思ふ。「南風」は兎に角初めて出来た文展といふ官立の展覧会の最初の二等賞といふわけで世間に騒がれたが「晩帰」は白馬会で専門家に僕の腕を認められたので、僕自身としての出世作は「晩帰」だらうと思ふ。「晩帰」は徳川さんの常陸大能牧場へ十一月立て籠つて描いたものだ。常磐国境の山奥で冬籠りも夏籠りもして其処に放牧してある馬を引張つて来ては描いた。馬を描くには馬に乗る位のは出来なくてとはと、裸馬にかじりついて乗馬を習つた。放牧した馬は気が強くて暴れ馬が多いので、よく投げ出されたり引摺られたり、さんざんの目に逢つたが、馬に乗る事だけは覚えた。あの頃は大作流行で随分長い間かゝつてうんうん描き上げたものだ。此頃のやうに人間が剛巧でなかつたので、短時間に要領よく描き上げるやうな事は知らない、何でも彼でも腕力で来いとばかりにがむしやりに大きなものをやつつけて得意がつたものだ。「晩帰」は六百円の売価で出品した。絵具代だけでも百何十円かゝたのだから、あの大作で随分安いものだが、当時としてははい、値だつたかも知れない。それを黒田さんの紹介で松方公が買いたいと云ふから四百円にならないかといふので負けた。其後それが岩崎男が買ふのであつて、安く買ふ為に松方さんへ手を廻した事が判つて勃然として世論が起つた。新聞は筆を揃へて松方、岩崎、黒田の三氏を難詰し一種の欺偽的行為と批難した。其難詰の演説会が開かれて和田垣謙三博士が大演説するといふ大騒ぎになつた。僕は「天下の富豪岩崎は何万円もの金を積んで大臣は自由にするだらうが、貧乏絵かきと雖も僕は此処に何万の金を積まれても自由にはならぬ。断じて売らぬ。貧乏絵かきの僅の絵代を値切るとは其さもしさ見下げ果てたものだ」と啖呵を切つてやつた。これは当時の大問題として大分知られてゐる事だ。其後「晩帰」はたしか七十円かで寺内さんを買つて貰つた。黒田さんが最初から売約の経緯を話さなかつたのが

悪かつたのだ。こんな事で「晩婦」も或一面有名になつた。僕は十九の時から白馬会に出品してゐたが、専門家方面には此作で認められた。河村清雄さんが「此男は行々ものになる男だ」と「晩婦」を見て云つたと後で聞いた。「南風」を描いたのが二十三の時だ。これを描かうとする迄にはロマンスがある。其時分の僕は伊豆の大島などの存在を知らず東京湾の向ふは漠然として唯歌などで八丈島といふ名を聞いて其処へ行き度いと思つてゐた。或る月明の晩に伊豆の伊東から八丈島通ひの郵便船に乗つた。小さな船で気持ちよく海面を滑つてゐたが、夜半から俄かに暴風雨となつて、全く文字通り木の葉のやうに翻弄されはじめた。僕は海の荒れる様を此時つくづく見た。風雨は刻々其の勢を増帆柱は折れ、帆は風に奪はれて、船は唯波濤の怒りに任せるのほか無くなつた。乗合ひの客は僕の他三人で一人は八丈島の船頭で前に相当やつてゐたが事業に失敗し、零落の身を郷島へと運ばれる途中一人は石工で細君に逃げられて、其細君が大島に居るといふ事を人伝てに聞いて仕事をしながら細君を探さうと大島へ渡る人、もう一人はどんな人間だつたか忘れたが、何れも喰ひつめ者ばかりで、此船と一緒に死ねば本望だといふやう連中ばかりだつた。其のうち老船長は「少しでも船の荷を軽くして船を助け度いから済まんことだが皆さんの荷物を捨て、貰い度い」といふ。石工の道具は一番重いので第一番に海へ投げた。続いて他の二人も荷物を捨てた。僕は小さな風呂敷包みと行李を持つてゐたので、船酔ひの苦しい中で行李を引出して捨てやうとした。すると老船長は「書生さんはまあお待ちなさい、貴君はまだ未来のある人だ、万一貴方の荷物を捨てる時は此の船も郵便物と一緒に沈む時だ、万一助つた時に貴方の仕事が出来ない。まあお待ちなさい。」と止めて呉れた。僕は此の時は全く感激した。風雨は過ぎても山なす波濤は止まず、或る時は苦しい頭を擡げると大島が烈日に照されて大きく見えた。それもいつの間にか遠く波の間にわからなくなつた。恚うして漂流すること三日間、やうやく大島に辿り着く事が出来た。海岸では郵便船が着かないので大勢海岸に集つて騒いでゐた。其処へ漂流の間に濡れ汚れた着物に蓬のやうに乱れた長髪といふ装ひで上陸したので島の人は皆吃驚してしまつた。其時宿屋は濱川屋と千代屋の二軒だつたが僕の風態を見て泊めてくれない。役場へ相談に行つた結果、気の毒だから何は兎もあれ泊めてやれといふわけで、やうやく落つけた八丈島へ行く積りが存在も知らない大島へ漂流したわけだ。画家が大島へ渡つたのは僕が皮切りで、其後大島は東京の美術家の写生地になつた。此時で郵便船の老船長は、責任の重い此仕事はととも老人には続けられないと辞してしまつた。此老船長に対する感謝と紀年の為に「南風」を書く気になつて、其為に郵便船に乗つて何度か、此間を往復して構想を練つた。「南風」は当時日本に初めて官設の大展覧会が出来て、其の中で最高賞を得たといふ事が、文展が珍らしいと同時に、世間的にもそれだけセンセーションも大きかつたのだ。僕が其処にぶつかつたのが運がよかつたのだと思ふ。其頃の文展は今のやうに、いくつも展覧会があるわけではなし、日本にたつた一つの国営の展覧会で何としても其勢力は偉大なものだつた。其初期には内閣総理大臣始め各大臣、それに美術に縁故のある人々も出席して帝国ホテルに其年の最高の受賞者を招待したものだ。第一回の時には日本画で菱田春章と僕で、総理大臣の西園寺さん、文部大臣の牧野伸顕さんに其他各大臣、それに末松謙澄とか金子堅太郎など、いふ人も見えた。其時僕はフロックもなし靴もなしで、すっかり友達のを借り集めて仕度だけは出来た。黒田さんが「手袋はあるか」といふので「無い」といふと「そいつ困るな！ それぢやこれを持つて行け」といつて、時分の持つてゐた白手袋の片方を貸してくれたので、片手袋を右の手に持つて出かけた。ところが借り靴が小さくて、一歩一歩、歩く毎に足の痛さが増して来る。痛いのを我慢して兎も角偉い人達の前へ出たが、とても痛くてやり切れないので食事中にとうとう脱いで了つた。ところが今なら宴会の終りも知つてゐるが、其の時は何も判らない、悠々と靴脱ぎのまゝで座つてゐると、偉い人達が立ち出したので、周章で靴を履かうとしたが、足探りではさあわからない。流石の僕もあの時は閉口した。偉い人達は知らなかつたと思ふが其時の僕の内心は唯事ではなかつた。

其翌年「鑄燠（マ）」で二等賞になつた時には、もう内閣が變つてゐて招待会には寺内さんが総理大臣で出て来た。二度二等賞が続いたので僕を留学させてやれといふ議が出て、文部省直囑の留學生としてフランスへ渡る事になつた。其の為文部省で試験を受けたが、あの時分は随分呑気なもので、皆人が代つてくれてパスした。フランス語は黒田さんが代理で受験して上成績でパスしたといふ出鱈目だつた。時の専門学務局長だつた福原院長が大に尽力して下さつた事を今も感謝してゐる。こんな事ですつとフランスへ行つて了つたので、いよいよ僕の運はよかつたといふもので、今少しまごまごしてゐたらぼろが出たかも知れない。

◇参考

最後に「南風」よりも前の和田三造作品に対する批評を掲載したい。和田三造の初期作品については1923年の関東大震災で焼失し、1945年の空襲では自宅やコレクター宅が被災して多数の作品が焼失、紛失したために残存している作品が非常に少ない。資料も少なく、彼がどのような作品を制作していたかなかなかわからない。ここでは白馬会出品作を評した各紙記事の中から『毎日新聞』記事を紹介する。因みにこの新聞は現在の毎日新聞の前身ではなく、1871（旧暦のため明治3）年1月に日本初の日本語による日刊紙として創刊した『横浜毎日新聞』の継続紙であり（1879年11月に『東京横浜毎日新聞』、1886年5月に『毎日新聞』、1906年7月に『東京毎日新聞』へと改名）1940年11月30日に『帝都日日新聞』に吸収合併されたものである。白馬会関係の和田三造関連記事は他にも存在するので機会があればあらためて紹介したい。

牛門生「白馬会雑言（三）」『毎日新聞』1903年10月21日

和田三造氏の「蜻蛉」は是亦平民的生活の有様にて落想は至極面白い、全体に光線の分ち難くて、青色の妙にぎらつくやら、庭の地べたと椽と並んで居るなどはあれど、其筆の臆気のなき処後來有望の青年画家として甚だ頼母しい心地がする



（写真3）「蜻蛉」第8回白馬会展出品（日本経済新聞社より1996年発行された『白馬会』展図録より転載）

「今年の白馬会（二）」『毎日新聞』1904年10月22日

和田三造氏の作大小取交せて都合九枚、吾人は其の巧みなる技術に讃嘆の辞を惜まぬ者である、美術学校の門由来秀才多し、少壯画家として氏は其の最も多望の一人であろう。為朝百合よりも静物の木槿の花の方が色に落付きがあつて佳い、靈岸島、及び雨の波共に面白く、大島婦人の肖像、色に癖があるか様にも思はるゝが、顔面の肉はよく著はれて居る、モデルの顔が、屹として雄々しく、夫坐して婦労働すてふ彼島の婦人の風が忍ばるゝ

のは、実に善い紀念である、暮の務めは九点の内最大の作である褐色の斑ある牛の側に夫は踞して乳を搾り婦の一人は桶を頭上に乗せて側を過きんとす納屋とも見ゆる家の内に他の婦は働きつゝあり、葉鶏頭色付きたる園も見えて、夕の色淡く黠く、農家の裏手のさまで海上遠くはないが、本土との交通不便なる大島島民の平和なる生活の状態がよく写されて居る真に好田園詩と謂ふべしあで

ある、総体に隈が明瞭過ぎはせぬか、今少し夕の光が柔く朧ろにあつたらば趣きが一層深くはあるまいか、又牛と人との間隔が判らぬ、無論狭い近い場所なれば、距離はないが、牛と人と平面をなして居る様に見らるゝ、され共茲に多くを需めない、吾人は此の詩想の下に此の作を成したる氏の勇氣と親切に謝せざるを得ない、和田氏の作中否な寧ろ今回の出品中にて最も妙らしき処を選びて描かれたるは三原山の絵である、此迄火山の画は多く見当らない此れ火山国と迄言はるゝ我国にして、実に妙な現象と云はなければならぬ、何故であろうか、無論奇らしさと美しさとが伴はぬと云ふ位は誰でも承知して居るが、美は火山にもあろう、否な寧ろ吾人は火山質国土の美を誇り度いと思ふ者である、看よ世界の人の目して以て美の生地をなす南欧以太利は何うであるか、エズイフの山古へより幾何計りの感化を人の子に与へたか、言ふ丈け野暮である、吾人は技巧の練磨の大切なを知らぬ者ではないが自然を描くにも只徒らに彼国の先輩の写す所を看て自ら選題の上に迄範圍を設くるの愚なるを思ふ一人である、尚氏と同じく世の所謂平凡なる自然の内に多く美は見出さるゝとして、書くもの毎に野、川、海辺、砂山、而も皆大同小異な景色を何処迄も墨守追従して居る事の甚だ迂なるを思ふのである、己の感じて以て美となせるものは其の何たるを問ふ暇があるか、刷毛を執つては須らく自由なるべし、奔放なるべし、是れこそ芸術家の勇氣であろうと思ふ。余談休題。

三原山の絵、和田氏の作中では暮れの務めに次ぐ大きさである、淡緑色の高き空に焼けたる赭色の夏雲は黴き、噴火口より昇る硫烟は白黄色に怪しく末は小さき獣めきたる形に、フラフラと中空に消え行く様共に目のあたり見るが如く良く写されて居る、又最も鮮やかに認めらるゝは高き山の頂が、空気の清澄な工合である、稍平かに青草短く焼土の地に斑をなし、晷影早や吾後ろに落ちて只噴火口の一角にのみ茜を止めて居る、此の噴火口の隆起が、海面を抜く事二千尺に近き山の頂であると誰が目にも承知させるのは此れ即ち氏が空気の描方に於ける成効なのである、吾人は此を以て、同氏作中の傑作とし此の美はしき山の茲に初めて紹介されたるの欣び禁せざる者である。

※ここで引用した文章の中で適宜旧字体を新字体に、旧仮名遣いを新仮名遣いにあらためている。

現代では不適切と見なされる表現もあるが、歴史的検証を重視し、そのまま用いている。

(ひらせ れいた 当館学芸員)

美術館と高等学校による共同指導の実践報告

一高校生学芸員による展覧会 「ぼくらの視点×あなたの出会い」を終えて―

本丸 生野

はじめに

1. 姫路市立美術館と学校との交流状況
2. 高校生学芸員による展覧会の実施にむけて
3. 指導のプランと授業内容
4. 展示構成について
5. 高校生学芸員の感想より
6. アンケート集計結果

むすび

はじめに

平成21年10月14日より3日間、「第46回全国高等学校美術、工芸教育研究大会」<2009兵庫大会>が本市において開催され、高等学校教育に携わる教師・研究者が全国から来姫した。この研究大会の特別企画展として、高校生学芸員による展覧会の開催が決まり、当館は協力者として企画実施に参加した。高等学校との共同展事業は全国的にも例が少ない。そのため本稿では、この展覧会の企画から開催、反響等について記録するとともにその意義を検証したい。また、今後の学校との連携の可能性についても考えてみたい。

1. 姫路市立美術館と学校との交流状況

本題に入る前に、当館の状況、殊に学校との交流状況を述べておきたい。

当館が学校との連携事業を開始したのは平成6年頃にさかのぼる。ここでいう連携事業とは、学校単位で単に美術館を利用する、美術館から情報を得るというものではなく「美術館職員と学校教職員の交流により実施する教育事業」である。どのような連携事業を実施してきたかについて以下に分類（4つ）し、各々の状況を記しておきたい。

(1)美術館と学校との共同プロジェクト (2)美術館行事に学校が参加 (3)学校行事に美術館職員が関わる (4)指導者向けのPR活動

(1)は美術館職員と学校教職員が共同企画して実施するもので、平成6年の「子どもアートフェスティバル」やこのたび報告する「高校生学芸員による展覧会」がそれにあたるが、その他小規模なものでは、近郊の小学校の教諭とのワークショップの共同実施や、近隣小学校の学童保育員と企画実施した鑑賞プログラムなどがある。相互の目的や方法論のすり合わせに労力を伴うものだが、美術館と学校教職員それぞれのノウハウの共有による相乗効果が期待できる。(2)は美術館が学校に事前に参加を呼びかけて行事を実施主催するもので、20年以上続けている恒例イベント「美術館に鯉のぼりをあげよう」がある。このほか、各種展覧会への団体鑑賞の受け入れもこのカテゴリに入れることができよう。(3)は学校側の主催実施する行事（授業を含む）に美術館職員を派遣（もしくは生徒が来館）し実施する普及事業である。平成9年頃から15年まで行った「出前美術館」や姫路市内の中学校生徒が職業体験をする「トライやるウィーク」の受け入れ、高校生を対象とした「イン

ターンシップ」がそれにあたる。「出前美術館」は美術館職員が市内の小学校や幼稚園からの依頼を受け鑑賞・造形指導を行うというものであった。のちに館内での鑑賞教育（展覧会毎の子ども鑑賞イベントの実施など）を充実化する方向への転換が図られて平成16年に「出前美術館」は終了となった。ただし、(1)の美術館と学校との共同プロジェクトの実施に関連して学校教育現場に館職員が出向くこともあるため、形を変えて「出前美術館」的な取り組みが存続しているという事もできよう。(4)は学校教職員へのPR活動である。たとえば中学校教育研究会美術科部会など学校教諭の会合の際に「鑑賞教育に美術館を活用しませんか」という文書を配布し利用方法を説明するといったものである。この活動は課外学習や部活動での団体鑑賞の利用率アップには貢献しているようだが、クラス単位、学校単位での動員には繋がっていない。学校が授業で美術館を利用するためには授業時間、交通手段、費用等の面での環境整備が必要であり、学校教育の現場で美術作品に直に向き合う機会を提供する方法については、課題となっている。

次に、連携の頻度の比較であるが、幼稚園から高等学校までのうち、団体鑑賞での利用が最も多いのは小学校と中学校である。「出前美術館」は幼稚園、小学校が多く、鑑賞とワークショップを組み合わせたプログラム実施は小学校が最も多い。高等学校については、去年度までは前述のインターンシップと団体鑑賞での連携があるものの、小・中学校に比較して頻度は低いうえ、企画時点での積極的交流はさほど行われていなかった。今回述べる事業(高等学校との教育事業の共同実施)は当館にとって未開拓の分野に属するものであり、それだけに実験的であった。

2. 高校生学芸員による展覧会の実施にむけて

次に、展覧会の概要と企画に至った経緯を記しておきたい。

展覧会の名称は「はくらの視点×あなたの出会い ―高校生学芸員による展覧会―」であり、平成21年10月14日～17日の4日間、市民ギャラリー特別展示室（イグレひめじ内）で開催した。展示作品は12点で、すべて当館の所蔵品である（出品作品は「4. 展示構成」参照）。

本展はさきに触れたとおり全国高等学校美術・工芸教育研究大会 <2009兵庫大会>の特別企画展として開催されたものである。同大会の姫路での開催に際し、関連事業として美術館とのタイアップ事業を行いたいとする大会事務局側の提案から始まった。提案当初の青写真は、当館の展示室において高校生が企画した館蔵品展覧会を開催するというものであった。その趣旨を踏まえた上で協議を重ね、会場の貸出の可否や協力方針その他もろもろの条件に折り合いつけ現実的な方向を探った結果、市民ギャラリーにおける小規模な館蔵品展の形で実現させることで一致した。比較的頻度の低かった高校生対象の普及事業に新たな展開を図りたいという当館側の思惑は、“授業の先進的なスタイルを提示し、高校教育の可能性を拡大したい”という大会事務局側のベクトルと一致し、協力体制がつけられた。

発案者は同大会の研究部長の浅野吉英教諭（兵庫県立西宮今津高等学校教諭）と同大会実行委員長の前野フキ教諭（兵庫県立香寺高等学校教諭）であった。そこに姫路市立姫路高等学校の前野フキ教諭が実動主体として加わり、展覧会の会場、運営方法、予算が大まかに決定するまで、美術館側の担当学芸員・本丸を含めた4名を中心に協議を行った。協議によって決定した主な事項は以下のとおり。

- ・展覧会の会期、会場
- ・展覧会の実施形態：姫路市立姫路高等学校の生徒が授業の中で学芸員として展覧会を企画、実施。
- ・展示作品：すべて姫路市立美術館の所蔵作品
- ・展示作品の調達方法：姫路市立美術館条例施行規則による貸出
- ・本事業における美術館の立場：協力者
- ・経費：ディスプレイ、展示等にかかわる一切を大会事務局側が負担

- ・広報：予算の範囲で印刷物を作成し配布
- ・その他、保険、作品コンディションチェック、輸送、出品申請の概要等について

これらの決定事項は「第46回全国高等学校美術、工芸研究大会 <2009兵庫大会>における高校生学芸員による企画展覧会について〔覚書〕」（資料1）に明文化して交わし、予算面、実施面双方の基礎的な条件が公認のものとなった。

3. 指導のプランと授業内容

大会事務局と覚書を交わすことにより実動への準備が整い、具体的な指導プランが練られていった。「高校生学芸員」として選ばれたのは姫路市立姫路高等学校の3年生文系の美術Ⅱの選択者全員で、女子が10名、男子は2名であった。発案の時期から数ヶ月で展覧会企画の授業が始まるという過密スケジュールの中、前野教諭が指導計画（資料2）を作成した。指導は4月以降週2時間の授業の中で行われることになり、10月の会期までの半年程度で展覧会準備を終えなければならなかったため、いかに効率よく進めていくかに苦心した。授業の流れは、担当学芸員との協議も経て以下のとおりで決定した。

- ①「展覧会」「作品」そのものについて学ぶ
- ②学芸員の仕事を学ぶ
- ③自分だけの企画書作り
- ④企画展の内容を決定し、趣旨を理解した上での作品選定
- ⑤展覧会タイトルの決定、チラシ案内用のあいさつ文の作成
- ⑥作品解説、展示図、会場模型、チラシ、キャプション・パネル等の作成
- ⑦設営作業立会い
- ⑧総括

当館担当者（学芸員）は、前野教諭と適宜情報交換・協議を行うほか、講義等のため同高校を訪れた。授業はすべて前野教諭の主導で行い、学芸員は、必要に応じて講義を行うという立場で参入した。間接的には全ての授業内容に関わらせてもらったが、授業時間に現場を訪れたのは計5回となる。その他、収蔵庫内での作品選定、展覧会設営作業の立会いを行ったため、直接的に指導に関わったのは7回（(1)～(7)）になる。

- (1) 出張授業1 2009年4月28日
- (2) 出張授業2 2009年5月12日
- (3) 出張授業3 2009年5月14日
- (4) 会場下見、収蔵庫内での作品選定作業 5月28日
- (5) 出張授業4 2009年6月16日
- (6) 展覧会会場設営 2009年10月13日
- (7) 出張授業5 2009年12月10日

次に、上記(1)～(7)各々の実務面の具体的な状況を述べていきたい。

(1) 出張授業1 2009年4月28日

美術館の役割、美術館の機能、展覧会の意義、学芸員の仕事についてスライドや冊子を使用して話をした。(写真1)



写真1

(2) 出張授業2 2009年5月12日

「展覧会のつくりかた」と題して手順を説明した後に、自分だけの企画案を作成してもらうというワークショップ形式で行った。生徒が書いた初期段階の「企画書」は当然ながら本人の関心の高いものがベースになっている。高校生学芸員が選んだテーマは以下のようなものだった(「学芸員になって、初期段階の「企画書」をつくってみよう」のキーワードメモより)。

- ・光と陰、明と暗、熱いと冷たい の対比
- ・「涼しさ」の2つの側面 (水の流れ、風の音などの涼しさと、恐ろしさからくる涼しさ)
- ・子供が自分の視点から見る家族や親、親が自分の視点から見る家族や子
- ・宇宙、生きている地球、丸くない星。現代人のアートする地球。ECO
- ・目の錯覚、動きのある作品、人の感覚を利用している作品、だまし絵
- ・抽象的表現の作品。不思議・モダン
- ・自分の現在、過去を見直す
- ・ブラックユーモア、無機質、素朴な美しさ、ゴシック、原色、栄枯盛衰
- ・不思議な絵、だまし絵
- ・身近なものをテーマにした作品、小さな作品、感情や音、形のない物を表現した作品
- ・絵本原画、絵本作家の絵、子どもの成長とか心理の表現
- ・ポップアート、レトロ

実際に企画を進めるにあたって、上記のキーワードから一つを選ぶ、つまり、高校生学芸員の企画書の中からいずれか一つを採用して掘り下げるという方法もあった。しかし、その方法では学芸員としての仕事の疑似体験はできるかもしれないが、出来上がった展覧会は高校生学芸員それぞれがもつ魅力、個性、能力を反映したものになり難いのではないかと懸念があった。単なる疑似体験や職業経験ではない授業を实践したい。それが指導者側の共通見解であった。プロの学芸員では不可能な展覧会、高校生だからこそ可能な展覧会こそ行すべきではないか。ではどんなものが可能なのか？

前野教諭との協議の中で、12枚の企画書に共通するものの存在を見出し、すべての高校生学芸員の自己テーマに通じるものを模索した。

高校生学芸員それぞれが現時点で関心を持つものは、1人ひとり異なる。この中から共通項を見出すとすれば、「自分が関心を持つものを追求する姿勢」、つまり、自己探求心からくるテーマ設定、いったところだろうか。

そこで考えたのは、一般的なテーマ(モチーフや時代、技法など)から離れ、それぞれの高校生学芸員の視点を提示するという展覧会である。つまり、テーマは「高校生の視点」。それを提示する方法についての協議を経て、指導者側の手による「企画書」を作成した。そして5月14日の授業で、指導者作成の「企画書」を配布し、プレゼンテーションを行った。高校生学芸員たちはその「企画書」を熟読し、理解を示した。

プレゼンテーションで高校生学芸員に語った「指導者側の想い」はおおむね以下の内容である。

- ・それぞれの高校生学芸員の視点の面白さを感じたことにより、この企画書が作成された。12名の中から1人の企画書を採用する手もあったが、展覧会企画の本質は、単にテーマを設定して、そのカテゴリに見合った作品を並べることによって実現するという単純なものではない。展覧会は作品を「鑑賞」するためのものであり、それを企画する者が、作品の何をどう見て欲しいか、という視点を提示し、それが鑑賞者の内面とコミットした時に「鑑賞」が成立するものなのだと思う。「鑑賞」が成立した瞬間、鑑賞者の内面には新たな視野が広がってゆく。高校生学芸員の瑞々しい感覚と思考能力は、豊かな体験としての「鑑賞」を実現できる可能性をもっている。その高校生の「鑑賞」体験を第三者—鑑賞者—に表現することで、鑑賞者に新しいビジョンを提供することができるのではないか。

- ・高校生学芸員それぞれが真剣に作品に向き合うためには、かけがえのない1点と出会う必要がある。その「私の一点」と向き合うことで鑑賞が深化することだろう。展覧会のテーマは「自分」と「作品」の間の世界。その「間の世界」を表現するという主体的な自己表現活動により展覧会をつくってゆく。できあがった展覧会は、「自分達でなければできない展覧会」という価値あるものになるだろう。

説明の中で「高校生でなければできない展覧会」と強調したことにより、高校生学芸員の創造性とやる気が刺激されたように思う。そして、授業時間が進むにつれ、自分自身をみつめ、作品に内面を向き合わせる、思考する、といった美術作品を鑑賞する体勢が作られていった。

<参考1：使用したプリント1>

2009年5月12日
企画展の実際
<ol style="list-style-type: none"> 1. モヤモヤ段階 2. 頭の中から「キーワード」を発掘し、抽象的イメージから具体的イメージへ 3. 作品とその所蔵調査とストーリーの組み立て、企画書作成 4. 意思表示、館内協議（内諾を得る） 5. ドリームプラン（作品リスト）の決定と出品交渉（貸出依頼） 6. 予算の確保 7. 写真撮影等図録の準備開始、各種調査 8. イベント決定と広報物の作成（会期5ヶ月前）、企画書（展覧会要項）完成 9. ディスプレイ、輸送等の内容決定・業者決定（会期3～5ヶ月前） 10. グッズの調整（会期2ヶ月前） 11. 記者発表（会期1ヶ月前） 12. 借用→額装 13. 会場設営 14. 輸送 15. 展示 16. オープニング、各種研修など
<p>※会期中はイベント、取材対応、団体解説などがある ※閉会後は作品返却、お礼、会計処理、報告書作成などを行い、記録を残す</p>

<参考3：高校生学芸員に配布した本展の企画案>

<p>「高校生学芸員による展覧会」</p>
<p>どんな作品をならべたいか（漠然としたものでも）書いてみよう。 <small>高校生らしい視点で選んだ作品、見る人が高校生の視点を感じ取れるような作品、多感な世代に属する高校生が自分の心の目で出品を決断した作品</small></p>
<p>上の言葉を別の言葉（キーワード）で表してみよう。 <small>「高校生の視点」「ふたつのビジョン」「私と作品、作品と私」「鑑賞＝創造」「私の1点、私の思い」「1：1 作品との対話」など</small></p>
<p>展覧会を開催する意味について、考えたことを文章にしてみよう。 <small>展覧会企画の授業の中で、それぞれの生徒の「夢のプラン」を考えてもらい、自分の言葉で展覧会企画書を書いてもらった。それらの企画書にはそれぞれの個性が現れ、興味深いものが多かった。（我々指導者は）高校生の「思考力」が結晶となる課程において生じる言葉・それ自体に面白さを感じひたった。“この「思考された言葉の面白さ」を展覧会の形に生かせないか。”そんな思いがはじめにあった。</small> <small>「高校生学芸員による展覧会」という課題において最も重要視すべきは、企画主体が他ならぬ高校生だという点である。「高校生らしさを全面に出したい」という思いは、指導者側の共通意識でもあった。とはいえ、高校生らしさ、とは一体何だろうか。自分の鋭敏な感覚で物事を把握し考えることが得意な時期。抽象的な言い方をすれば、そのようなことになろうか。</small> <small>そこで考えたのが「高校生のナマの目による選定作品」の展覧会である。美術史上の価値や作家の名前で作品を選ぶのではなく、地に足をつけて、自分の目と心（頭）で選ぶのである。</small> <small>テーマは「自分自身にとっての（かけがえない）1点」。それらを自分自身の言葉で解説する。解説は、いわゆる一般的なもの（美術史上のデータによるもの）ではない。「観察・思考の結晶」としての「言葉」である。それを作品と共に大きく提示するという展覧会である。このような展覧会こそ、多感な高校生の本領を発揮できるものなのではないかと考えた。瑞々しい感性と思考力が織り成す「言葉」が、館蔵作品とともに展示された空間は、来館者に新鮮なビジョンを提示し、もう一つのイメージの世界へといざなう翼を提供することだろう。</small></p>
<p>では、具体的に何を展示しますか？ <small>（「高校生学芸員」がこれから吟味して決定）</small></p>
<p>メモ</p> <p><small>展覧会を特色あるものにするため、高校生がそれらの作品を読み解いた文章を記したパネルを設置。さらに、それらのパネルの文章に秘めた「高校生らしさ」に来場者の目を向けるためのしかけとして、もう一つの「解説」（指導者側が作成）もあわせて展示する。こうすることで“作品に対峙した多感な高校生のクリエイティブな心の動き”を示し、“鑑賞”は新しい創造活動そのものである”という事象に気付いてもらえる構成をめざしたい。</small> <small>この展覧会では、一般的な“学芸員の手による解説文”ではタブー視されがちな「個」のスタンスを土俵入りさせる。</small> <small>高校生の文章は一般的な解説文とは明確に異なるものが望ましい。それが個性的であればあるほど、クリエイティブであるからだ。</small></p>

(3) 出張授業 3 2009年5月14日

前載の企画案を高校生学芸員に配布し理解を得たあとで、具体的な作業・作品の荒選定を行った（写真2）。当館から持参した館蔵品図録（9種約25冊）から出品候補作品を選定してもらった。選定作品を記入する用紙として、前野教諭作成の「作品選定候補メモ」のフォーマットを使用した。このフォーマットは、5作品分のタイトル、作者等をメモできるようになっており、最終的にそのうちの任意3点に○を入れることになっている。○をつけた3点について、後日収蔵庫内で実見する予定である。45分間という限られた時間内で荒選定作業を完了させるのは困難だったため、任意で昼休みや放課後を利用して選定を行ってもらい、数日後、原則1人3点



写真2

の実見希望作品リストが完成した（参考4）。

選定作業に先立ち、作品のコンディション確保のため、屏風や軸などの乾燥に弱い作品や展示ケースに入らない大型作品は展示不可である旨を説明した。また、作品の解説文はなるべく読まずに、図版イメージから受ける印象を重視してもらうよう呼びかけた。これは、思考の扉を閉ざさないためである。ことに活字化された印刷物の場合、解説文が絶対的な解釈であると誤解され、それをなぞる形での鑑賞に陥ることがある。これはいわゆる袋小路に入ってしまうことに似ていて、見る力を育てる鑑賞教育を行うには相応しくないと考えたためである。絵画の解釈には知識が必要である、という見解は当然ある意味では肯定すべきであるが、あくまでも見る姿勢、見るという行為自体が鑑賞の出発点なのである。

<参考4：生徒作成の「作品選定候補メモ」の例>

作品選定候補メモ						
展覧会に O/I	作品名	作者	技法(版画・油彩など)	大きさ	出展参考文献等(ページ、図録ナンバー)	
①	○ 1373の白い点	ホーレ・ペーリ	板・ナイロン・モーター	直径103.0cm 厚み28.0cm	館蔵名品展 P123	
②	○ LIFE TO SHARE?	永井一正	シルクスクリーン	103.0x72.8	P12 目録Ⅲ	
③	「リルケ『マルテの手記』より、一行の詩の片断に は」より『作者の傍らで』	ハン・シャーン	リトグラフ	57.0x45.0	館蔵名品展 P117	
④	○ 無題	吉原治良	水彩	130.5x162.2	P48 日本美術	
⑤	○ ムーン・スクア	野村仁	写真	28.0x38.0	P13 目録Ⅱ	

作品選定候補メモ						
展覧会に O/I	作品名	作者	技法(版画・油彩など)	大きさ	出展参考文献等(ページ、図録ナンバー)	
①	○ WORK 70-11	小野田 實	ミクストメディア	91.6 x 91.6cm	所蔵品目録 P38	
②	○ " 63-A	"	"	91.4 x 91.5cm	"	
③	○ 「作品」	元永定正	油彩	183.5 x 183cm	赤い本 P56	
④	○ 1928年頃、台湾高雄 にて、白いリボンの帽子を 被った感項の母と	望木 絵津子	コンピュータ加工写真	206 x 145cm	コレクションでつくる 札幌市立へ P59	
⑤	○ 淋しい水	河野 通紀	油彩	80.5 x 100.6	" P56	

実見作品の選定

「作品選定候補メモ」を受け、他館への貸出や館内使用予定、展示場所の物理的制限、作品コンディションの良悪などを調査し、美術館内の協議により展示の可否を判断した。実見作品は原則一人2点程度とし、○の記された作品(下に記載の候補作品中、下線のあるもの)を優先とした。実見作品を制限した理由は、①事前に絞ることにより一点一点をじっくり吟味できるようにするため、②作品の安全面の確保を含めた事前準備を行うためである。収蔵庫内にある作品は、作品の取扱

いに慣れた学芸員による事前準備(安全な場所を確保し、そこに開梱して配置するなど)を要する。
 「作品選定候補メモ」に記入された作品は日本作家の作品が40点、海外作家が19点であり、海外作家のうちベルギー作家の作品が17点と高い率を示した。ベルギー作品の一つの特色である神秘性や内面性の高さが高校生学芸員の感受性に刺激を与えたのではないかと思われる。しかしながら、当館のベルギーコレクションは、同時期に他館への貸出がすでに決定していたため、他の作品を展示候補としなければならなかった。

一方、日本作家についても内面性や叙情性に秀でた作家を選ぶ傾向が見られた。浜田知明の作品を候補メモに挙げた生徒は4名、中村忠二は3名、上野長雄は3名、麻田浩は2名であった。また、日本・海外を問わず、現代的な作品も多数選ばれた点も特色であろうか。ポール・ピュエリ、野村仁(2名)、藤原向意、松谷武判、小野田實、菅井汲、吉原治良らの現代的な作品も挙げられた。

「作品選定候補メモ」に記された作品、館内協議ののちに決定した「実見作品一覧」は以下のとおり。

<「作品選定候補メモ」の候補作品(原則1人5点。下線作品は○の記されたもの。)>

- 生徒A 「甲地」藤原向意、「作品63-A-36」松谷武判、「悪い医者」ジェームズ・アンソール、「観光案内人」ルネ・マグリット、「サイコロ」鴨居玲
- 生徒B 「竹に小鳥」野村正、「ウサギ(4)」野村正、「猫」新井完、「鷹(3)」野村正、「白鷺城の一角」小山敬三
- 生徒C 「WORK70-11」小野田實、「1928年頃、台湾高雄にて、白いリボンの帽子を被った4歳頃の母と」笠木絵津子、「淋しい水」河野通紀、「WORK63-A」小野田實、「作品」元永定正
- 生徒D 「日本のかたち」上野長雄、「風刺的詩集」フェリシアン・ロップス、「古い物語」フェリシアン・ロップス、「蓮池」浜田観、「天井画一絵画、音楽、詩歌」フェルナン・クノッフ
- 生徒E 「あそび」上野長雄、「9月16日」ルネ・マグリット、「水に映る太陽」野村仁、「やもりと手」上野長雄、「絵をかく少女」中村忠二
- 生徒F 「悪い医者」ジェームズ・アンソール、「スクランブルC」菅井汲、「取引」浜田知明、「飾窓」上野長雄
- 生徒G 「観光案内人」ルネ・マグリット、「マグリットの捨て子たち XI」ルネ・マグリット、「幕の宮殿」ルネ・マグリット、「夢・家」麻田浩、「マグリットの捨て子たち VII」ルネ・マグリット
- 生徒H 「ピエロの葬送」アンリ・マティス、「サーカス」中村忠二、「副校長D氏像」浜田知明「マグリットの捨て子たち XII」ルネ・マグリット、「(資料)」谷中安規
- 生徒I 「朝の月」森崎伯霊、「横たわるセレーネ」アントワヌ・ブルデル、「日光山」池田遥邨、「初年兵哀歌」浜田知明、「噴水のある風景」中村忠二
- 生徒J 「少女」白瀧幾之助、「花」上村松園、「エッフェル塔」ポール・ピュエリ、「天井画一絵画、音楽、詩歌」フェルナン・クノッフ、「地方名士」浜田知明
- 生徒K 「1373の白い点」ポール・ピュエリ、「LIFE TO SHARE 2」永井一正、「無題」吉原治良、「リルケ『マルテの手記』「一行の詩のためには」より、『死者の傍らで』」ベン・シャーン、「ムーン・スコア」野村仁
- 生徒L 「夜の中庭あるいは陰謀」ドグーヴ・ド・ヌンク、「夢・家」麻田浩、「初年兵哀歌(歩哨)」浜田知明、「廢墟 神戸の教会」藤尾龍四郎

<実見作品一覧>

- 生徒A 「甲地」藤原向意 「作品63-A-36」松谷武判

- 生徒B 「竹に小鳥」「ウサギ(4)」「猫」野村正
 生徒C 「WORK70-11」小野田實、「1928年頃・・・の母と」笠木絵津子
 「淋しい水」河野通紀
 生徒D 「日本のかたち」上野長雄、「蓮池」浜田観
 生徒E 「あそび」上野長雄、「絵をかく少女」中村忠二
 生徒F 「スクランブルC」菅井汲、「取引」浜田知明
 生徒G 「夢・家」麻田浩
 生徒H 「サーカス」中村忠二、「副校長D氏像」浜田知明
 生徒I 「朝の月」森崎伯霊、「横たわるセレーネ」アントワヌ・ブルデル
 生徒J 「少女」白瀧幾之助、「エッフェル塔」ポール・ビュერი
 生徒K 「1373の白い点」ポール・ビュერი、「LIFE TO SHARE 2」永井一正
 「無題」吉原治良
 生徒L 「廃墟 神戸の教会」藤尾龍四郎、「夢・家」麻田浩、
 「初年兵哀歌（歩哨）」浜田知明

(4) 会場下見、収蔵庫内での作品選定作業 5月28日

当館の規則に基づく特別閲覧許可申請書を受け、実見作品確定後の放課後、展覧会場の下見と当館収蔵庫内で作品の実見による最終選定を行った（写真3）。（12名のうち1名（生徒G）は欠席。）実見に際し、材質や形状などのデータを書き込める調査票「決定した作品についての説明書を考えよう」を準備し、主観的な視点だけでなく客観的な視点でも作品を観察できるようにした。同調査票には自由に感想等を記入できるスペースもつくり、印象を記憶にとどめられるように工夫した。当初は約1時間を予定



写真3

していたが、現場での要求に応じ予定外の作品も実見。結局約3時間の大選定鑑賞会となり、それぞれの高校生が、自分の内面を投影させながら作品を鑑賞し、選定していった。高校生学芸員が展覧会終了後に綴った感想を読むと、この選定鑑賞会により、高校生学芸員の中でそれぞれの展覧会像がリアリティを帯び、高校生学芸員としての意識が格段に高められた様子がわかる（「5. 高校生学芸員の感想より」参照）。

興味深いのは、実見予定作品の中から作品を選んだ生徒より、候補に上げていなかった作品を最終的な展示作品に選んだ生徒の方が多かったことである（12名中、実見予定作品に含まれる作品を選んだ生徒は4名のみ）。荒選定に使用した資料の図版が小さかったためという理由もあるが、複製物には再現し得ない作品そのものの物質感、マチエールなどの皮膚感覚を伴う鑑賞行為・実見によってはじめて「作品を判断する」環境が整い、選定が可能となるということを示しているのではないだろうか。では事前の荒選択の作業は無意味だったかといえそうでもない。3500点もの所蔵品を抱える当館の作品を片っ端から実見することは不可能であり、それゆえ何らかの形で事前に荒選定を行わねばならない。事前の荒選定の作業は、自分の求める作品の傾向を客観的に見、選定の照準を定める練習にもなったと思われる。

< 参考5：使用した調査票 >

決定した作品についての説明書を考えよう

作品名 (ふりがな)	作者名 (ふりがな)	
制作年	西暦 年 (年号 年)	
サイズ	支持体サイズ: h _____ cm × w _____ cm × d _____ cm	
	展示サイズ: h _____ cm × w _____ cm × d _____ cm	
	形状: 軸・屏風・額装 (面: 裸・ガラス・アクリル)・その他 ()	
材質	平面	支持体: 紙・布・板・その他 () 表現: 油彩・水彩・パステル・版画 ()・鉛筆・木炭・ その他 ()
	立体	材質: ブロンズ・木 ()・石膏・石 ()・ その他 () 台座: なし・あり ()
作品についてのメモ		
色		
形		
質感		
その他		
作品について最初の印象、実際見た感想、作品への思いを		

< 5月29日現在（収蔵庫内の見学後）の選定作品 >

※下線のついた作品は上記「実見可能作品」に含まれるもの

※網掛けの作品は最終的な展示作品

生徒A 「行く秋」 丸投三代吉 第二候補「甲地」藤原向意
生徒B 「ウサギ(4)」 野村正
生徒C 「淋しい水」 河野通紀
生徒D 「日本のかたち」上野長雄 第二候補「飾り窓」 上野長雄
生徒E 「あそび」 上野長雄
生徒F 「撮影開始」 川口雄男
(生徒G 「夢・家」 麻田浩) ※欠席のため実見せずに図版等で選定
生徒H 「ナルシスト」 松本宏
生徒I 「森の想」 高橋忠雄
生徒J 「少女」 白瀧幾之助
生徒K 「I'm HERE 6」 永井一正 第二候補「LIFE TO SHARE 4」
生徒L 「歩む道」 麻田浩

(5) 出張授業 4 6月16日

出張授業3で企画案について説明する中で、展覧会名を協議する上での注意点も述べた。その後の授業で展覧会名の協議が前野教諭主導で行われ、後日当時の候補タイトル（参考）についての報告を受けた。

それを受けての出張授業となった。

4回目の出張授業は、展覧会名に求められる明確性について話をすると同時に、高校生学芸員それぞれが執筆した解説原稿（5～600字程度）から展示用パネル原稿（250字程度）を作成する工程についての説明を行った。展覧会名については、展覧会のコンセプトが明確に表されるもの・具体的な展覧会像が把握できるものにするため、再考を依頼した。一方、展示用パネル用の解説文の作成は、自分以外のすべての高校生学芸員の解説文をそれぞれが読み、面白いと感じた部分に下線をひいてもらい、もっとも多くの下線が引かれた部分を残す形で文章量を減らすという方法を取ることにした。

後の授業を経て暫定的に決定したタイトルは「ほくらの視点 あなたの出会い」。12名中10名が女子であるが「ほくら」の方が未成年らしい、という意見で一致したとのこと。指導者側からは、「ほくらの視点」と「あなたの出会い」という2つの言葉の関係性を強調するために間に「×」を入れることを提案。高校生学芸員一同の同意を得、タイトルは「ほくらの視点×あなたの出会い」で決定した。

< 参考：候補タイトル >

- ①高校生（いはけなし視点）の可能性
- ②ガラスの破片にうつるもの
- ③多角形
- ④多感な空想と経験による事実
- ⑤私の目 あなたの目
- ⑥思い～本気の作品を本気で感じる～

※ 上記以外に生徒から出たタイトル案

あいまいみー ～根拠のない自信～／ 等身大の主張／ いはけなし視点から

ファーストインプレッション・ざ・市姫 / 個個個個個個個個 / モノクロ センス
 あいまいみー / 僕たち LAB / トーンダウン
 堂々巡り / I caaaaaan! ~根拠のない自信~ / 160センチの世界 - 等身大の主張 -
 自分のカケラ探し展 / 『私たちの美術』

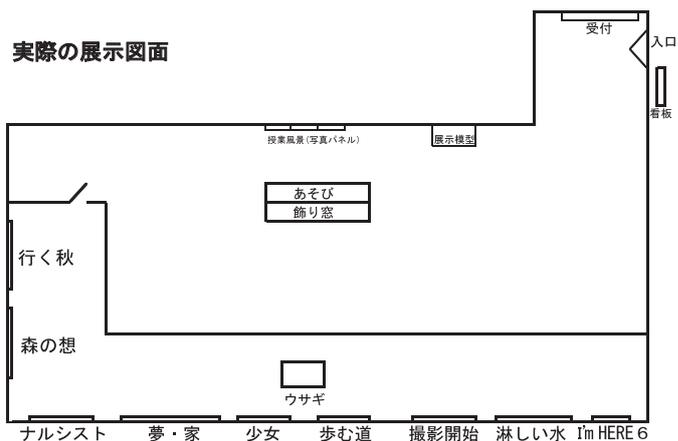
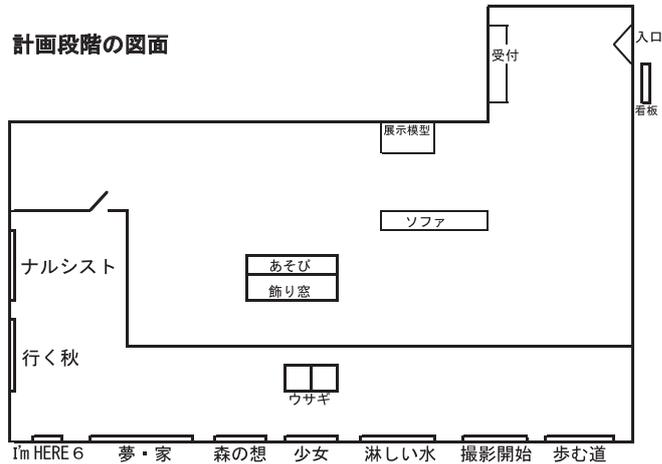
(6) 展覧会会場設営 10月13日

作品の取扱い作業にあたったのは日本通運の美術梱包スタッフである。高校生学芸員らも展示作業に加わり、美術梱包のスタッフの業務についての説明などを受けた後に作業を開始した。作品、キャプションや解説パネルの設置位置の検討(写真4)、写真パネルの設置などを高校生学芸員が行った。展示作業の全工程に高校生学芸員が立ち会うのが理想であったが、日程の都合でそれは叶わず、約2時間のみの立会いとなった。



写真4

作品の配置については、事前に高校生学芸員が作成した展示計画をもとに仮配置し、再検討した(下図)。



(7) 出張授業5 12月10日

展覧会終了後に総括のために同高校を訪れ意見を交わした。

4. 展示構成について

本章では、それぞれの展示物の状況を具体的に記録しておきたい。

(1) 展示物

作品、解説パネルの他、あいさつ看板、授業風景の写真、模型（写真5）を展示した。また、指導者側で作成した同展の記録集（A4 28ページ・全解説文掲載）を展示室内に配置し、自由に持ち帰ってもらった。

参考：あいさつ看板

ごあいさつ

この展覧会は、ほくたち高校生が自分たちの感性だけで、つまり“ファーストインプレッション”によって、直感的に選んだ姫路市立美術館所蔵の作品を展示しています。あえて、この展覧会では、作者の名前や、時代背景、価値にはこだわらず選びました。そして、作者が何を考え、何を伝えたいのか想像をめぐらせ、自分なりにその作品と本気で向き合いました。

私たち高校生側、指導者側の“2つの視点”をより感じとっていただけるよう工夫しています。

そこにまた、あなたの視点を足していただくことでさらにこの展覧会が趣き深いものになるでしょう。あなたも僕たちの議論の中へ参加してみませんか。

平成21年10月
姫路市立姫路高等学校・高校生学芸員一同

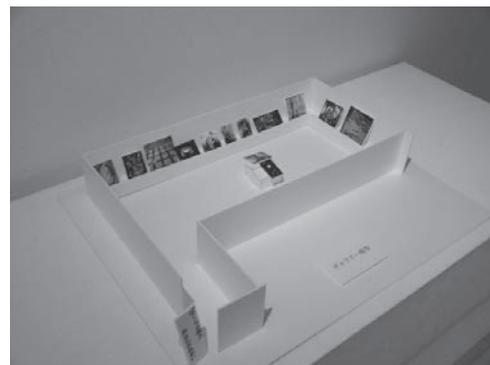
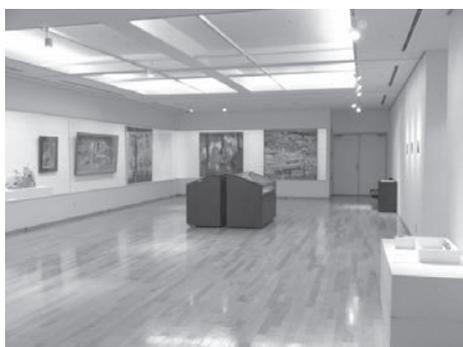


写真5



会場入口



会場風景



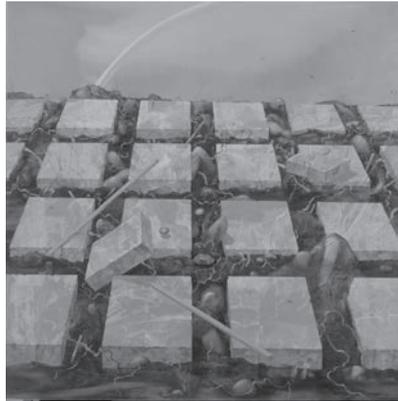
写真6

(2) 解説パネル

6月上旬には出品作品が確定し、作品の解説文作成が始まった。解説文の趣旨は、展覧会の企画書が決定した時点で共通認識を得るに至っており、比較的スムーズに執筆活動に移ることができたようだ。前野教諭による助言、校正を経て、7月中には解説パネル原稿が確定した。解説パネルは作品の手前に2種（生徒・学芸員）を並べて展示した（写真6）。

以下に作品図版と展示したパネル原稿を掲載する（作家名順）。なお、パネルの解説原稿は、高校生学芸員・当館学芸員が執筆した解説文の全文ではなく高校生学芸員それぞれが他生徒の文章の中から興味深く感じた部分を抽出したものとなっている。

1 麻田浩 歩む道 昭和49年 油彩・布



この絵は、人類が歩んできた歴史の裏の多くの犠牲者達の叫びが描かれているように思う。よく見れば地中には人の手や足、上半身までもが描きこまれていて、本当は気分が悪くなるくらい禍々しい絵だ。

きれいな石畳と卵は、未来とその上を歩く新しい命や僕たちで、「今お前達が立っているその場所は祖先が引きつぎ、築き上げてきた文化の頂点だ。」とその下に眠る者たちは、傲慢に生きる我々人間の腕をその冷たい手でつかんでいるようにすら思える。それが恐ろしくも思えたが、同時に魅力でもあった。

この絵は現代を風刺するとともに、今を生きる人たちに「任せたぞ」と言ってくれているのではないだろうか。

(高校生学芸員氏名)

麻田浩は、同志社大学経済学部に進みましたが、在学中に気鋭作家・桑田道夫に師事し、昭和38年の初めての個展の開催を機に洋画家として生きることを決意しました。「歩む道」は、昭和46年からの長期滞欧期に描かれたものです。当時の麻田は、ヨーロッパの古典絵画から影響を受けつつも独自の表現を模索していました。空には虹が架かっていますが、キリスト教では、虹は完成をめざして奮闘する人を示すと言われます。「歩む道」は麻田自身が画家として歩んだ道なのかもしれません。

2 麻田浩 夢・家 平成6-7年 油彩・布



私は最初この絵を見たときに、本当に絵画なのか!? と思いました。黒い背景の中に白い建物がポーッと浮き上がっている感じであるにもかかわらず、建物の存在感はとても大きくて、且つ写実的であったからです。

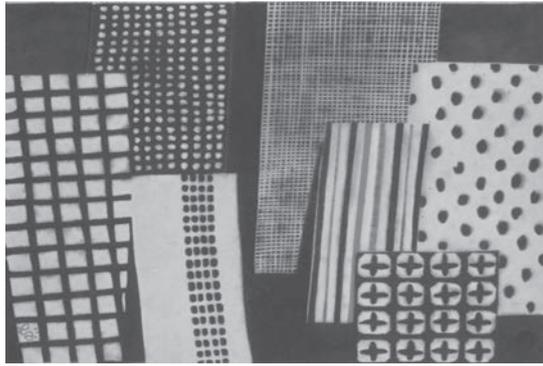
私なりの解釈ですが、麻田浩氏が「住みたい」とか「行きたい」と思っているのでは無くて、「夢を見る家」という意味なのだと思います。昔は人が住んでいたのだろうと推測できます。この家は「また誰かと一緒に暮らしたい」と思っているのではないかと私は考えました。

下界の事物をその存在感においてよりは光をあび空気で包まれた印象で表現しようとし、リアルの奥のリアルに感動しました。技法や思想その他もろもろ本当に芸術は奥深いなあと思いました。

(高校生学芸員氏名)

麻田浩は幼い頃、板目に浮びあがる「シミ」などをじっと見つめて、自由にイメージを膨らませることに熱中したといえます。この作品に見られるフロタージュ的な表現や、違和感を持たせるモチーフの組み合わせは、シュルレアリスム(超現実主義)の影響を色濃く感じさせるものです。これらの表現方法は、前記の画家の幼年時代の体験に源泉を認めることができるでしょう。半開きの扉、誰も居ないように見える家の煙突から立ちのぼる煙、床に繋がっていない階段など、綿密に作品を観察すればするほど不可思議な点に気付かされます。

3 上野長雄 飾窓 昭和39年 木版・紙

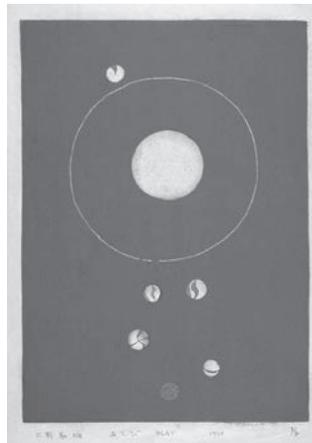


黒い画面に日本独特の様様がバランスよく配置されていて、かわいいと思わず声を上げてしまいました。この「飾窓」は、繊細な和を感じさせるデザインで、色に深みがあり、趣き深いのに、どこかモダンな印象を受けました。飾窓の後ろが黒だからこそ、奥深さが増えています。黒色のバックの中はどんな光景が広がっているのか、考えながら鑑賞するのも楽しいなと思います。また、青基調の飾窓の中に一本赤いラインが入ることによって、この作品がより印象的になっています。飾窓は、馴染のあるような柄が多く、見たことのない飾窓でも懐かしさを感じました。デザイン的な絵だからこそ、個人個人の想像する“窓”は様々だと思います。初めて見たときのイメージを大事にしても、じっくりいろいろな視点から見てほしいです。

(高校生学芸員氏名)

飾窓とは、いわゆるショーウィンドウのことです。意匠さまざまな縦長の長方形が配置されていますが、その緋（かすり）のような風合いや形状から、呉服店のショーウィンドウに陳列された反物が想起されます。この作品が摺られた頃の飾窓は、いま街中で見るような現代型のものとは異なるでしょうが、上野は何らかのショーウィンドウを眼にし、その粋な意匠に触発されて本作品を制作したのかも知れません。単純な模様と長方形という幾何学的な形状の組み合わせによる本作は、抽象作品として認識されがちですが、一歩ひいて、この画面自体が呉服店のショーウィンドウだと思って眺めてみると、リアルな具象画として鑑賞を楽しむこともできるでしょう。

4 上野長雄 あそび 昭和45年 木版・紙



ひかえめな無邪気さを感じました。この作品を風景で表すと女の子が毬つきをしているようなイメージです。背景の重ね摺りで出された紅色と朱色の中間のような赤色に濃いめの色なのに主張しすぎない、包み込むような温かさに引き込まれました。何となく周りにいる人の今まで気付かなかった良いところに気付いた感覚に似ています。鬼ごっこや隠れんぼの鬼と逃げる側を表しているように思いました。ビー玉のようなもようが夕暮れまで楽しそうに遊ぶ子どもたちが一人ひとり輝いている様子に思えます。

(高校生学芸員氏名)

1968年頃から、上野長雄は自身が「円の連作」と呼ぶシリーズを制作しています。それらの作品について、上野は「型が単純なものなので色彩・歪み等により自分の心象を表現して観念をよび醒して見た作品」と語りました。この作品は円の連作がちょうど終了した頃に制作されたものですが、ここに描かれた形も実に「円」ばかりです。画面上部の円については前述の「円の連作」の性格を引き継ぐもの、つまり抽象的な意味合いを持つものと解釈をすることもできるでしょう。例えば円陣やコミュニティのイメージなどの解釈も可能です。そしてビー玉たちは、その円に加わろうと寄って行く子どもたちの姿のイメージに重なるかもしれません。

5 川口雄男 撮影開始 (大船撮影所) 昭和17年 油彩・布



初めて見たときに、まるで写真のようで目の前で本当にドラマの撮影をしているかのような印象を受けました。今流行しているファッションにも似ているように感じ、おもしろいと思いました。川口雄男氏の他の作品は、日常の一瞬をとらえたものや、優しい瞳を持つ人々の姿があり、暖かい気持ちになるようなものばかり。特に女性の姿が柔らかい印象が持てました。この「撮影開始」でも台本を持つ女性や着物の女性の視線が下を向いていて、色っぽく、どこか優しい印象を持ちました。私たちが知らない、昭和を生きる女性のおしとやかさを感じる作品でした。

(高校生学芸員氏名)

川口雄男はこの作品を描いた前年に横浜の大船撮影所(松竹)取材した「朝風に立つ」という作品を制作しています。本作品は、その際に目にした光景を後にイメージし、自宅の庭で家族をモデルに構図をつくって描いたものです。具体的には、脚本を読む白いブラウスの女性は画家の姪で、手前の黄色い和服の女性と奥の日傘をさす女性は画家の夫人、さらにカメラを操作する男性は画家の弟ということです。「撮影開始」というタイトルからは、一瞬の動きやしぐさを表現しようという画家の意識が感じられます。実際にモデルを使って入念に構図を検討した成果が、独特の臨場感となって画面に現れています。

6 河野通紀 淋しい水 昭和52年 油彩・布



描写がリアルです。このリアルさにとてもひかれました。質感がまったく違います。バックを真っ黒にしてあるのは、木の台と鉄の器を強調するのが目的だと思います。明るいとところに目がいくので、誰もがまず水のところを見るでしょう。そして、この作品にはバックの一部分だけ、光沢のでる油絵の具が使われています。これにも何か理由があり、見た者に考えさせたいのだと思います。一つ一つが非常にリアルでありながらも、物にだけ光が当たっていてバックには光が当たっていないところがあったり、真っ黒なバックの中のうずらの卵だけが明るかったり、と少しおかしな、あり得ない状況でもありますがまたおもしろいところでもあります。リアルな描写に驚かされ、感心しながらも考えさせられるところに興味を持つ作品です。

(高校生学芸員氏名)

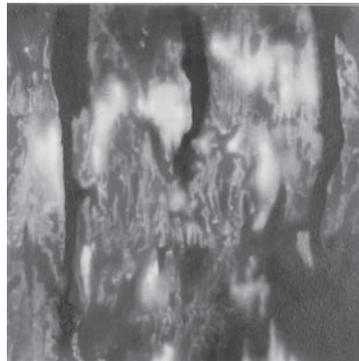
「私は独善的抽象化を好まない。リアリズムでもないが、現実の地表をふんで、リアリティのあるものを描きたいと思っている。」これは河野自身の言葉です。独善的・ひとりよがりではなく、誰もが共有できる姿に描こうという信念が、彼にスーパーリアリズム的な描き方へと導いたのでしょう。さらに、単なる写実の作業に終わらない要素(非現実性)を取り入れることで、作家の個性が発揮され作品そのものに面白さが付加されています。現物と見まがうように描かれた「物」を、不自然に組み合わせるという手法は、描写がリアルであればあるほど非現実性・不思議さが際立ちます。このような彼の作品を、ある研究者は「マジック・リアリズム」と名付けました。

7 白瀧幾之助 少女 明治33年 油彩・布



<p>私はこの少女が何かに思い悩んでいる様子がなぜか似ている、と感じました。自分が「少女」の時空へ吸い込まれるかのような感覚がしました。何かを思いながら、考えながら、遠くを見るように。</p> <p>実際にこの作品を目の前にすると、思っていたよりもとても大人らしくて驚きました。作品名では「少女」となっていますが、本当にこの女の人は少女なのだろうか、と疑問を抱きました。影によって顔の表情をひきたたせていると思います。私はこの何かを考えているような少女のうつむいている表情に魅力を感じます。</p> <p>何時間でも向き合って、ずっと見ていたい作品です。</p> <p style="text-align: right;">(高校生学芸員氏名)</p>	<p>この作品が描かれた時代の洋画壇は、西洋のアカデミックな絵画の影響を受けた旧派(明治美術会)と、印象主義の影響を受けた新派(白馬会)が対立構造を見せていました。白瀧は新派(白馬会)の流れの中で、明治洋画壇の中核をなす一作家として活躍していきます。当時はこの「少女」は前衛的な作品であったと言えるでしょう。白馬会は、黒田清輝が率いるグループでした。この少女が描かれた3年前、第2回白馬会展で出品された作品に有名な同氏の「湖畔」がありますが、光の当たる角度や衣装(水色のストライプの和服に黒系の帯)などに類似点が多く認められます。同じく白馬会に出品していた白瀧が「湖畔」を間近に見たのは事実であり、その関係を伺わせる作品です。</p>
--	---

8 高橋忠雄 森の想 平成10年 アクリル・綿布



<p>何かひきつけられる。きっと高橋氏は、この絵を描いているとき、何かに苦しんでいたのだ、と思う。森の想いは、森の怒りであり、森林伐採の反対を訴えているとも思う。</p> <p>“想い”というものは、色々な色であらわすことができるけれど、白はどんな想にも染まり、無心で、黒はどんな想にも染められない強い想で、何か絶対的な感じがする。この正反対の二色を、混沌とした感じであらわしながらも交ざり合わせることはない。そこには緩やかな反発を感じる。木は自分の死すらも運命として受け入れる暖かい想いであるようだ。黒は木(自分)を殺す人間への怒りをあらわしている。</p> <p style="text-align: right;">(高校生学芸員氏名)</p>	<p>高橋忠雄は、もともとは彫刻家で前衛的な抽象作品を手がけていましたが、49歳の頃に倒れ、体への負担が軽い陶芸・絵画制作へと転向した作家です。ここに見るようなタイプの抽象・半具象的な大作から、地元加西の羅漢を描いたシリーズ作品、色彩の美しさを追求したミニ絵画など、その活動は多彩です。「森の想」は、黒や白、そして青の微妙な色彩を巧みに変化させることにより、空間の深みのみならず精神性さえも宿すことに成功しています。光沢感を排除したマチエールにも特色があります。絵の表面そのものの触感、物質感—マチエールへのこだわりは、皮膚感覚に鋭敏な彫刻家の視点の表れと言えるかもしれません。</p>
---	---

9 永井一正 I'm HERE 6 平成4年 シルクスクリーン・紙



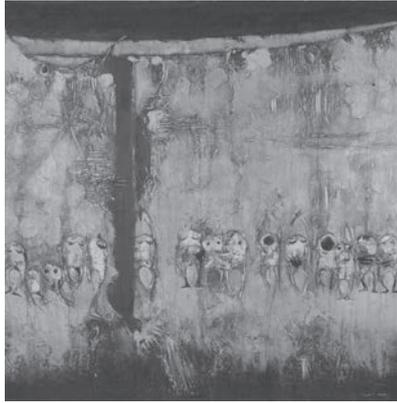
<p>この一つつなぎの円のようにつながっているオオカミとヘビの体が地球の大地を表現しているように思いました。私たちは普段、主観でしか物事を見ていません。人間の被害のことが重大で、動物たちのことは二の次、三の次にしか考えられません。「I'm HERE 6」(私はここにいる)自分たちも地球上で同じように生きているのだと、動物たちが訴えているように思いました。私はこの二匹が弱肉強食の争いを止め、一つの緑をお互いに守っているように思いました。互いに手を取り協力して大切な資源を守っていかねばならないと、私たちに訴えているように思いました。独特の絵柄とパッと目をひく色づかい、動物たちの力強い瞳がそのことを強く訴えかけています。 (高校生学芸員氏名)</p>	<p>永井一正は、初期からおよそ35年間は企業のシンボルマークやポスターなどの抽象デザインを追及していましたが、のちに具象形へと転換しました。具象転換後に永井作品に登場したもので最も多いのは動物です。自身が描く動物について、作家は以下のように語っています(一部要約)。「これまでの人間中心の世界には見えてこなかったもの、我々が共有すべき相手としての生命というものを、彼等にかわって表現していかなくては本当の意味での生命に対する畏敬の念は象徴されない。だから単にリアルに描いてもだめで、象徴化が必要になる。僕が描くほとんどの動物が人間みtainな目をしているのは、彼等が人間から見た愛玩用の動物ではなくて、人間と対等なものとして存在するということ。」</p>
--	--

10 野村正 ウサギ(4) 不詳 木彫



<p>何度もこの作品を見直していくうちに、色々なことを考えるようになりました。小さくて狭いウサギ小屋の中にいるような飼うウサギの姿ではない、しなやかで伸び切った身体、遠くを見すえる瞳、ピンと立った耳、太くて短く、どっしりとした足。野生のウサギのように、美しく堂々としているウサギだな、と思い直しました。二匹で一組のこのウサギ達のタイトルは、何の変哲もない「ウサギ」。いったいこの二匹は何をしているのでしょうか。私は夫婦のウサギが子供を護る為に空からの敵に対峙している様に見えました。 どんな作品もじっくり見ることで、自分の中で色々な世界が広がります。この作品を見ている貴方の中にはどんな世界が広がりましたか？ (高校生学芸員氏名)</p>	<p>野村正は、社寺彫刻師の内弟子として職人的技能を身につけた作家です。師の没後はその技を継いで社寺彫刻師として活動しています。昭和6年には上京し、日本美術院同人の彫刻家・佐藤朝山の阿吽洞学童に入門、院展などに出品しながら佐藤朝山の助手として社寺彫刻等の制作に従事しています。野村正の作品は動物を題材としたものが非常に多くなっています。戦前の展覧会出品作のほとんどが馬か犬で、そのほかにも鳩、鷹、牛、蛙、ネズミ、小鳥など多彩です。今回の出品作品のウサギは、やや荒削りな仕上がりで量感を強調したものになっています。ソフトな彩色を施すことにより、ウサギそのものの愛らしさを示すと同時に、どっしりとした量感によりモニュメンタルな雰囲気も感じさせます。</p>
---	--

11 松本宏 ナルシスト 昭和39年 油彩、砂・布



直感的に自分の大好きな作品だと感じました。色合いも暗くて頹廢的で、ブラックな雰囲気も素敵だと思います。明るい色、ぱっとした色が使われているわけでもないのに、実物を見ると凄くインパクトを受けます。油絵ですが砂も使われていて、ざらざらとした虚ろな雰囲気がかもし出されています。60年代のロックが思い出されました。背景の汚れのような、ヒビのような描き方も綺麗だと思います。

(高校生学芸員氏名)

ここに見る「ナルシスト」は、この時代の松本作品の傾向を顕著に示すものです。極度にデフォルメされた、鳥とも蛙とも見まがうような人間がこちらを向いて並んでいます。大きな口で何かを叫んでいる人、目を閉じて佇んでいる人、手を振り上げている人、そしてごつごつしたマチエールと色彩…何やら不穏な雰囲気が画面を覆っています。ナルシストというタイトルは、一般的に「うぬぼれた人」「自己愛者」といった解釈をすべきか判断が難しいところです。松本は昭和57年にはナルシス（自分の美しさにこがれ死にした青年）を直接的に表現した作品「ナルシス」や「レダ」も手がけており、ギリシャ神話への関心を示しています。

12 丸投三代吉 行く秋 昭和33年 紙本着色



今にも人々の話し声や、「おーい」と人を呼ぶような声が聞こえてきそうな気がします。「お父さん帰ろうよ」「もうちょっと待ってな」といった会話が聞こえてきます。時間的にもおながすいて早く帰りたいと思っているのであろう子どもの様子が伺えます。夕日は描かれていませんが、木や人の影からこちら側に夕日が沈んでいく美しい光景があるのだろうと想像させられます。この作品の中の人々は毎日忙しく農作業をしながら、充実した日々を楽しく送っているのだろうと思うくらい、生き生きと描かれていてとても楽しい気持ちになります。児童絵画のように健康的で、色使いもあたたかく優しさが溢れていると思いました。見ていて飽きない作品です。

(高校生学芸員氏名)

丸投三代吉は徴兵によってシベリア抑留生活を体験し、氷点下50度下での過酷な毎日を過ごした画家です。無事に帰国を果たした時、「生きていることへの感謝・喜び」を実感し、それを画に向けるようになりました。「この世に生きているものは、人であれ、小動物であれ、昆虫であれ、魚であれ、すべて友達なのです。」とよく語っていたそうです。

秋の農作業の一コマを描いた本作品は、画家にとっての出世作です。昭和33年、姫路市展で市長賞を受賞、続いて再興院展で初入選となりました。遠景でやや見下ろす構図で描かれた人々の営みの情景は、私たちが日頃忘れがちな精神的な豊かさの価値そのものを提示してくれているようです。

5. 高校生学芸員の感想より

授業の中で、高校生学芸員の意見を複数回にわたって綴ってもらった。それを以下に記録しておきたい。彼女らの感想は、今回の共同展開催の教育的な意義を示しているものと思われる。

(1) 一学期終了時の感想より

- ・学芸員になるという貴重な体験をさせていただけるということで、大変嬉しく思っています。最初は内容があまり分からなくて微妙でしたが、自分で絵を選んだり模型を作ったりし始めると、だんだん楽しくなってきました。ただ、その反面、テーマを決めたり、自分の絵に対する考えを書いたり等、楽しいけれどとても大変でした。大体できあがってきたので、展覧会当日がどうなるか楽しみです。一学期はこの内容だけで終わってしまったけれど、実技では学べない体験ができたので本当に良かったと思っています。テーマやタイトルを決める時、みんながそれぞれ個性が強くてまとめるのが大変だったけど、最終的にまとまったので、チームワークの大切さを学びました。
- ・美術館の保存している絵を見ることができたり、皆と意見交換したりと貴重な体験をたくさんすることができました。この展覧会を頑張って成功させたいです。
- ・他人の意見を否定することなく、一つの見方として捉えること、また作品を見ることによって自分なりの解釈をし、それを人に伝えて更に考察することを学びました。
- ・たくさんの作品を実際に見ることができてよかったです。
- ・もっと絵を描きたかったです。
- ・展覧会を作っていく過程で、今までと違って美術というものをじっくり見られて楽しかったです。感じることを文にして人に伝えるのは本当に難しいことだと改めて思いました。それと自分の表現力の無さが悲しかったです。作品と向き合うときは、自分の感想でなく、作者の思いを大事にして見ることを学びました。それと作品を扱う上で気を配ることが多いことも学びました。
- ・まず今までを通して思うことは、裏方で球技大会や姫高祭を目指して準備、運営を行う生徒会の仕事と似ているなあと思いました。今年の美術の授業では、自分が作品を作るという視線ではなく、既に作られた作品と向き合う、それも自分の考えを主張する。作品への思いを文章にするのは難しかったです。美術館の収蔵庫の中へ行ったり、1つ1つを決めるためにみんなで会議したり、模型作ったり、ちらし作ったり、どんどん新しいことと出会ってとっても充実していました。1つのことをするとき、みんなで1つ1つ丹念に、気持ち込めてやっていく。みんなまで1つの空間をつくる。すばらしい経験をしていてとっても楽しく、自分の表現力のなさにショックしつつ、学芸員ってカッコいいなあと思いました。この学年で本当によかった。
- ・美術、芸術というのは奥深いことを改めてより一層ふかく感じました。また、美術・芸術というのは作品・作者だけではないということも知りました。今までの作品の見方や作品への思いの込めようが変わりました。
- ・今までに経験のないことばかりで、一時間、一時間学ぶことが多かった。はじめの頃はまったく形の見えなかった展覧会企画が、みんなでどんな展覧会にするか決めたり、気に入った絵を選んだり、その絵について考えてみて文章化したりする過程で、少しずつ形が見えてきて楽しくなった。絵について文章を書くのはとても難しく、思うようにいかなかったけれど、文章にしようと言葉を考えることで作品に対する気持ちに新しく気づくことも多かったと思う。企画の中で一番楽しかったのは展覧会のタイトルを決めることだった。みんなのこの展覧会に対する気持ちがよく表われていておもしろかった。「あいまいみー」がぼつになったときは悲しかったけど、最終的なタイトルは全員一致で決まったのでうれしいし愛着がわいた。

- ・芸術に深く関わっている人の芸術に対する誠実さを学べたと思う。また、作品をあつかうことがどれだけ大変なことなのか、今まで知らなかったことを実際に見ることで具体的に学べた。
- ・「自分達で展覧会を作る」という高校生にはなかなか出来ない貴重な体験をさせて頂くことになり、初めはすごく楽しみな反面、本当に出来るのか全く自分で完成のイメージが持てず、不安でもありました。けれど、自分で作品を選び、実際に美術館の収蔵庫の中に入り実物を見ての新たな発見や考える事が多く、すごく新鮮でした。そして、一つの作品を向き合うことで、自分なりの解釈ではあるけれど、自分の感じた事を他の人に見てもらうことで個性や新しい何かをあたえることが出来る！これも「美術」であり、普段は作品を作るばかりだけれど、展覧会制作によって私の「美術」に対する考えの幅が広がったと思います。
- ・画家の人たちは、作品の中に様々なメッセージや主張をめぐらせている。そして、その作品を違う視点から見ること、新たな解釈や発見をしたり、色々なことを考えさせられることを学びました。
- ・今までにやったことのない初体験のものばかりで、次に何をやるかが毎回毎回楽しみでした。初めて作品が収蔵されているところに行って、本物の作品をたくさん見れて、良い経験になりました。自分で選んだ作品も間近に見れて感動しました。それをふまえた上での、展覧会の企画は、題を決めるだけでも一苦勞で、大変でした。実際の展示はまだだけれど、もうだいぶ迫ってきているので、良い展覧会にできるよう、頑張りたいです。
- ・一つの展覧会を開く大変さと、隠された努力が分かりました。こんなに人数がいても上手にいかないものだと、あらためてこの仕事の凄さを実感しました。
- ・美術館の倉庫に入れるなんて思わなくて、貴重な経験でした。でも色々作ったりもしたかった。学芸員さんがいらして僕らが音楽を語るように美術の世界を語り合えたのは、かなり絵の見方が変わる一件でした。アートは深い。題名ひとつ考えるのにもユニークじゃなくてシンプルで分かりやすいものがよかったり自己満足の芸術でもだめなんだなと思いました。絵の感想は本当に苦勞しました。
- ・絵の裏の多くの思いに気づくことができたり、感じとろうとすることで無限大に楽しめるんだとわかった。
- ・普通に授業をやってきたけれど、よく考えるとすごいことをさせてもらってるなと思います…。一番感動したことは、やっぱり収蔵庫の見学です。自分が見たいと思った作品をどんどん見せていただいて、たくさんの美術作品をかなりの近距離で、生で見れてかなり楽しかったです！大きい絵とか迫力がかなりやばかったです。長時間だったのも見てるときは気にならなかったです。この経験は一生忘れないです。みんなで展覧会のために協力し合って作業するのはとても楽しいです。今までなかった特別な企画ができて嬉しいです。今後もしもできるなら後輩たちにもやってもらいたいです。
- ・美術館の仕事に直接ふれてみたことで、ひとつの展覧会を開くことの大変さを学びました。構想を練って、展覧会名を考えるのにも何回も話し合っ、他者に伝えることの難しさも分かりました。
- ・最初に展覧会を自分たちでプロデュースするという話を聞いたときは、全く意味が分からなく、無理無理と思っていましたが、学芸員さんの話を聞いたり、実際に絵を見に行ったりして気持ちが変わってきていい展覧会を作りたいと思っています。めったにできない貴重な体験なので、頑張っって自分で納得してみなさんにも喜んでもらえるようなものにしたいです。
- ・みんなで協力して一つのことを決めたり作ったりするのは難しいけど楽しいことでもあると思いました。

(2) 完成された展覧会場、展覧会を見た感想より

- ・準備をしていたときと違って、会場に緊張感があって、作品一つ一つの存在感が際立っていました。照明の当たり方で、作品がこんなに違って見えることに感心しました。写真や模型も、会場をつくっていることに初めて気がつきました。
- ・自分の書いた文が、プロの画家さんの絵の横に置かれていることに、緊張しました。客観的に見てみると今回の企画に参加できたことが幸運だと思いました。
- ・あきらかに、自分の選んだ作品は場違いな気がしました。でも、個人的に好きな作品なので満足しています。
- ・照明がついているだけで、展覧会の雰囲気が変わるなあとと思いました。思っていたよりも“ファーストインプレッション”や“視点の対比”が感じられなくて、ただ絵を見ているおばあさんとかいたのでちょっと残念でした。完成された展覧会を見て、改めて学芸員の方々や先生や運搬にたずさわってくださった方々のおかげでこうしてみんなの選んだ絵が見てもらえるんだと思いました。
- ・実際に設置された様子を見て、自分が選んだ作品が飾られているのが何だか不思議な感じがしました。自分で描いたものではないけれど、企画してきてすごく思い入れがあったので見た瞬間「あ〜」って思いました。みんながそれぞれ選んだ作品が、校内ではなく公の場に展示されるという機会なんてもう無いと思います。本当に良い経験になりました。
- ・ライトの感じがすごく良かった。展示作業の時とは違う、展覧会独特のオーラがでていました。1点1点が本当に個性的でした。全部の作品を見た後、なぜかホッとしたような、おだやかな気持ちになりました。あつかったです。こんな貴重な体験をさせていただいて本当にありがとうございました。
- ・授業でパソコンにデータを打ち込んだり、発泡スチロールを切ったりしている時にはあまり実感がわかなかった展覧会づくりも、実際に会場に行ってみて、展示したことによって、自分たちがこの一つの展覧会をつくり上げたんだな、と誇らしい気持ちになりました。
- ・まず、一番思ったことは、照明によって絵の雰囲気がすごく良くなったなあとということです。倉庫で見た時より、10倍も20倍もキレイに見えました。あと、作品の並べ方もじっくりきていて良かったです。展覧会にすることで、自分達のことを他の人に発表する機会はなかなかないことなので、あらためて展覧会を見に行ってみて、して良かったと思いました。携わっていただいた人々に感謝しています。
- ・準備していたときと全然様子が違ってドキドキしました。空調機の音が聞こえるくらいに静かで、神聖な場所のように空気が張りつめていたので緊張してしまいました。私が見ている間に10人くらいの人が入り出ていましたが、私たちの解説を読んでいる人があまりいなかったのが残念でした。
- ・土曜日に1人で展覧会場に入ると、何か張りつめている空気があり、これぞ展覧会の雰囲気なのか、と初め感じたものがあり、とても充実した時間を過ごせた。私はいろんな展覧会に行ったわけではないけれど、何かやはり、まだまだ高校生だと思った。でも、展覧会に来られたお客さんがみんなの絵を見ているのを見て、この人は何を考えているのかなあと、考えると楽しかった。
- ・迫力があってちょっと感動した。お客さんは自分だけでしたが、たくさん来てくれたみたいで嬉しかったです。先生のコメントかっちょよすぎて恥ずかしくなる自分。
- ・自分たちで考えてきたものがすごく立派な展覧会として完成されていてとても嬉しい気持ちになりました。配置もばっちりだったと思います。自分達の感想と、作品解説が横に並べられてあることと、壁に貼らずに下に置いたことが良かったと思いました。ぱっと作品だけを見渡せるし、集中して見るができると思いました。

- ・ライトアップされてきれいに並んでいる様子を見てみると、今まで感じていた作品のイメージをはまた違った印象を受けました。特に「行く秋」の赤い色がとても目立っていて、その隣の「森の想」は対比されるように静かに目に映り、その隣の「ナルシスト」でまた強いインパクトを受けました。あの三作品は、この展覧会場の中で特に目を引く所だと思いました。こうやって貴重な体験ができて、本当によかったです。

(3) その他、終了後の感想より

- ・収蔵庫に入れてもらったことが、今でも強く心に残っています。本当に“生”のままの作品に間近で触れることができるとても良かったです。
- ・ひとつの展覧会を作ろうとすると、ほんとにたくさんのことを計算しないといけないということを経験しました。「美術」に関わる大人たちの存在が嬉しいと感じました。
- ・一番は倉庫に入れて、プロの仕事を少しでも経験できたのが新鮮でした。
- ・チラシの文字や配置で「展覧会」を表すのは、とても難しいなあと思った。言葉遣いについても難しく学ぶところがたくさんあった。1つの絵と向き合い、また、新たな自分を発見！みんなの価値感（観）にもふれられて良かったなと思った。
- ・インパクトがありつつも見やすく、相手に情報が正確に伝わるように（チラシを）デザインするのってすごく難しいことだなと思って、デザインにも興味がわきました。展覧会の文章考えているときも、人に言葉を伝えるのって難しいなって思いました。
- ・（作品を扱う輸送業者の美術スタッフが）思っていたより簡単に作品を扱っていて驚きました。
- ・説明文や写真の位置を決めるのをしたけれど、見る人が一番見やすい位置、間隔を決めるのは思ったより難しかったです。
- ・作品の配置について、最後までもつれたけれど、展覧会に行ったとき、一番じっくりきました。みんな決めた展覧会、やっぱりイイですね。
- ・パネルを作る作業をしましたが、このような裏方の仕事がないと展覧会はできなかつたと思うので、そういう点ではやりがいのあり仕事できて満足です。
- ・模型づくりを改めて反省しました。完成品をいまいち想像できなくて失敗の連続で、展示されている模型を見て、細かいところにもっと気を配るべきだったと思いました。作品をガラスケースに入れる様子は初めて見て、思っていたよりケースの中が移動しやすそうで驚きました。

6. アンケート集計結果

会期中、展覧会場内にアンケート用紙を設置した。寄せられたアンケートは58枚であった（資料4：集計結果）。自由表記の欄に多くのご意見が寄せられたので、以下に転載しておきたい。

- ・違った視点からの解説はとても作品を味わう上でわかりやすく、又、素直な高校生の解説は感動的でした。（44歳女性）
- ・高校生の方の解説が良かった。珍しい企画なので今後も続けてほしい（18歳女性）
- ・高校生の文章はどちらかといえば主観の強い“感想”の意味合いが強く、学芸員の文章は少々“知識”的側面が強く感じられた。少々かみ合っていない印象を受けました。（40歳男性）
- ・とにかくみなさんが（考える）ことについて考えられているのが、とても気持ち良かったです。がんばってください。（38歳男性）
- ・高校生の感性はみずみずしくて素晴らしいですね。作品解説の表現がどれも素晴らしかった。（28歳女性）
- ・一般の方々、又若者達子供達ももっと美術に関心を持ってほしい。（69歳女性）

- ・高校生が作品と無理やり向き合い、そこでこれ迄に感じなかったことが感じられるようになる様が、面白い。(68歳男性)
- ・チラシを見て、面白い企画内容だなと思って見に来ました。もっと大規模で、またこのような企画があれば来たいです。自分の高校時代にも、このような体験の機会があればなあと感じました。(25歳女性)
- ・準備から展示までご苦労様でした。作品解説の比較、G o o d。(58歳男性)
- ・男子生徒は2人？(62歳男性)
- ・高校生は感性が豊かで画の鑑賞にもしばしば感じられる言葉で語られていて感心しました。若い気持を私も持ちたく思いました。(77歳女性)
- ・このような企画展を見たのは初めてだったので、とても興味深かったです。企画展という授業を通して、鑑賞の力だけでなく、作り出すことの喜びと苦労を感じているんだなと思いました。(21歳女性)
- ・2つの作品解説が、見る人によっていろんな考え方があるということを手前に表せていると思いました。(16歳女性)
- ・高校生の感じたことを読んでみると、美術への関心の高さが伝わってきます。解説があるとなるほどと思いますが、見ている私の見方がいけないかなと思ってしまいました。(56歳女性)
- ・今後の鑑賞の参考になりました。(62歳女性)
- ・姫路の美術館の企画展示には時々行くので、興味があったので見学させていただきました。解説があったので分かりやすかったです。(44歳男性)
- ・とてもよく考えて、選んでくれたと思います。あなた方の視点、とてもよかったです。これからもその感性大切に！！(52歳男性)
- ・今回の展覧会の主旨が聞いてよかったです。高校生の感性のようなものにふれることができたと思います。(20歳女性)
- ・非常に面白い企画であった。今後是非つづけてほしい。自分の学生時代の先生の若い時の作品に出会えて感動しました。(46歳男性)
- ・高校生が学芸員さんと、ほぼ同じ仕事ができ、自分のコメントが会場で見てもらえる素晴らしい企画です。(46歳男性)。
- ・このような展覧会は、はじめてで、すごく心に残るものばかりでした。私とあまりとしもかわらない人が、こんな視点で見ているんだとすごく感動し、面白かったです。(16歳女性)
- ・自分たちで作品を選んで、解説を作って展覧会を開くのは、すごい楽しそうだなと思いました。貴重な体験ができたみたいで、うらやましいです。(16歳女性)
- ・私の好みのシュール的、抽象的な絵があった。麻田浩の2作、河野通紀、松本宏等は、大学時代から描いては失敗している、あこがれの絵だ。今度ぜひ、またチャレンジしたい。(52歳男性)
- ・高校生と学芸員との作品解説をくらべながら見ることで、作品から伝わる内容、着眼点の違いを見ることが出来てとても良かったと思います。(26歳男性)
- ・もう少し作品があればいいことありません。(44歳女性)
- ・高校生による解説が思ったよりもきちんと書けていて、たいへんわかりやすかった(19歳女性)
- ・油彩はすごく本物みたいで素晴らしかった。昔の絵でも今も変わらずその時の思いが伝わってくるようだった。(34歳女性)
- ・学校現場と美術館が、生徒のために連携してできた素晴らしい実践だと思います。(53歳男性)
- ・多くの館藏品の中から何を選ぶかから決めていったのは、より作品を見る目がシビアになり、真剣さが伝わってきます。最初の感動を大切にされていて、こちらにも新しく感じさせられました。(57歳女性)
- ・直接、じかで絵を見るのと、鏡一枚を通してみるのでは、また印象がちがうなあと思いました。

(17歳女性)

・様々な絵が展示してあり、おもしろかった。自分と同じ高校生がどういう視点でこの絵を見ているのかわかり、おもしろかったです。自分と同じような考えがあったり、こういう点のところが気になるのに、といたことが多く参考になりました。(15歳男性)

・もうすこし、自分達を前面に出し、何が言いたいのかハッキリさせる事が欲しい。(60歳男性)

・私たちと同じ年代でここまでかけるなんてすごいと思った。私も美術部なのでがんばりたい。

(16歳女性)

・もっと大きくやった方がよい。(42歳男性)

・学芸員の方の話がとても興味深かったです。これからの勉学等、活かしていけたらと思います。

(18歳女性)

・高校生から見た作品の感想は参考になりました。(66歳男性)

・先生の視点、学生の視点の違い、若々しい感性、するどい見方、興味をひくガイドでした。(56歳女性)

・展示物は少なかったけど、見ごたえがありました。(39歳女性)

・企画としておもしろい。(65歳男性)

むすび

本展のコンセプトは、「高校生だからこそ可能な展覧会」であり、作品を介した思考を表現する展覧会であった。さらにそれが高校生でなければできない展覧会であればあるほど、展覧会そのものの存在意義が向上すると考えていた。“高校生それぞれが作品にコミットし自分なりの解釈を行い、それを展覧会場で提示する。来場者は作品とその解釈(解説文)に会場で出会い、自己を関連付けながら有機的に鑑賞して欲しい。”という思いがあった。そのため、展覧会に出品する作品は、「私の大切な一点」である必要があった。

実際展覧会を鑑賞した方々からは、高校生12名それぞれが、「私の一点」に本気で向き合っつむぎだした言葉(解説文)が心の琴線に触れた、といった内容の感想も寄せられたのは光栄であった。その他にも多数の好意的な意見をいただいたことを思うと展覧会そのもの、つまり連携事業の成果物の評価は一定のレベルに達することができたと考えている。参加した高校生学芸員にとっては寝耳に水のスタートであったが、授業を展開していく過程で自分が実際に展覧会創りに参加しているというリアリティを獲得していった様子がアンケートからうかがえる。展覧会の成功は、高校生学芸員の瑞々しい感性と創造意欲の賜物であったと思う。

本展の最大の特徴であった2つの視点(高校生学芸員と指導者)の提示については、多くの意見が寄せられた。あいさつ文やチラシで趣旨を強調したことが功を奏し、解説パネルが2点ずつ設置されていることに対しては理解不足から生ずる意見は殆どなかった。むしろそれぞれの着眼点の違いを読みとけながら鑑賞し、それぞれに思いを馳せた来館者が多かったようだ。美術展としては稀有なスタイルであったが、一定の理解を得られたと考えてよいと思われる。

高校生学芸員による展覧会実施事業は、美術館と高等学校という異なる2者の連携によって行われたものだが、その2者間に様々な相違点があったからこそ複合的な教育が可能となった。例えば、学びのスタイルの相違点もその一つである。美術をめぐる学びには大きく2つの性質がある。美術を知る学びと、美術を通した学びである。前者は、美術作品に描かれた歴史的背景を知るなどの知識蓄積を目的とするもので、後者は、美術作品の制作や鑑賞を通して生じる心の動きに主眼を置き、知識を伸ばすことを主たる目的としないものである。美術館の普及活動の多くは前者に重きをかけており、学校教育における美術・図工教育は後者に重きをかけている、という解釈が一般的である。このように異なる二者が出合い、それぞれのスタンスで関わりあって作られた展覧会は、新し

い学社共同学習のスタイルを提示できたのではないかと考える。

今回のような試みは、全国高等学校美術、工芸教育研究大会の開催がなければ叶わなかっただろう。美術館学芸員として高校の教育現場に参入させていただいた経験は、貴重で学び深かった。その上、熱意ある高校教師や高校生の学びの姿から手ごたえを得ることもできた。高校生学芸員をはじめ全国高等学校美術、工芸教育研究大会の関係者の方々に感謝の意を示し、本稿をとじたい。

※本展の企画に参加した高校生学芸員は以下の12名（50音順・敬称略）。

井口美彩貴、内野侑香、古林由衣、坂田千紗、清水美里、世古宗司、濱田綾斗、濱田芳美、古隅香名、松浦楓、満山沙葵、山岡利名

第46回全国高等学校美術・工芸研究大会<2009兵庫大会>における

高校生学芸員による企画展覧会の実施に関する覚書

姫路市立美術館（以下「甲」という。）と兵庫県高等学校教育研究会美術・工芸部会（以下「乙」という。）は、第46回全国高等学校美術・工芸教育研究大会（2009兵庫大会）において開催される高校生学芸員による企画展覧会（以下「展覧会」という。）の実施に関し、別紙のとおり覚書を締結する。

なお、本覚書の成立を証するため本書2通を作成し、甲及び乙が各1通を所持する。

平成21年 月 日

甲

住 所 姫路市本町68番地2-5
団体名 姫路市立美術館
代表者名 館長 山脇 佐江子

乙

住 所 兵庫県高等学校教育研究会美術・工芸部会
団体名 会長 藤井 淳一
代表者名 (兵庫県立東はりま特別支援学校校長)

1 展覧会の実施要領

- (1) 名 称 高校生学芸員による企画展覧会
- (2) 主催者 全国高等学校美術・工芸教育研究会、兵庫県高等学校教育研究会美術・工芸部会
- (3) 会 期 平成21年10月14日～10月17日
- (4) 会 場 市民ギャラリー特別展示室（イーグレひめじ地下2階）
- (5) 観覧料 無料

2 展覧会の開催に関する甲の協力

- 甲は、展覧会の開催に関して次のとおり協力するものとする。
- (1) 展覧会の計画段階における情報提供や生徒への指導を行うこと。
 - (2) 展覧会の企画を行う授業へ学芸員を講師として派遣すること。
 - (3) 展覧会で展示する作品を貸出すること。
 - (4) (3)の作品の集荷、移動、陳列、撤去、返却に際して立会いすること。
 - (5) 広報等のために必要となる作品のポジ等を提供すること。
 - (6) (4)の業務を委託するに際して必要な業者等の情報及び業務に伴う保険加入に関する情報の提供と手続きの補助を行うこと。
 - (7) その他必要な業務

3 乙が行う業務

- 展覧会の開催に関し、乙は次の業務を行う。
- (1) 展覧会を企画すること。
 - (2) 展覧会の企画を行う授業へ学芸員を講師として派遣するよう甲に依頼すること。
 - (3) 展覧会の展示作品について甲に借用依頼を行うこと。
 - (4) (3)の作品の集荷、移動、陳列、撤去、返却を専門業者に委託し実施すること。
 - (5) (4)の業務委託と併せて必要な保険に必ず加入すること。
 - (6) 展覧会の会場の施工、ディスプレイの制作を行うこと。
 - (7) 展覧会の広報物を作成し、配布すること。
 - (8) 展覧会の会期中、会場の警備及び作品の監視業務を行うこと。
 - (9) その他必要な業務

4 展覧会の開催に関する責任

- (1) 展覧会の開催に関する上記3の業務については、乙が責任を負う。
- (2) 展覧会の運営上の事故については、すべて乙の責任において処理する。

5 費用負担

- (1) 展覧会の開催に要する一切の経費は乙が負担する。
- (2) 甲は、上記2の業務に要する経費のみを負担する。
- (3) 甲は、乙に貸し出す作品について、乙から借入料を徴収しない。

資料 2

学習指導案 **展覧会をひらく**

1. 題材名「展覧会をひらく」
2. 題材設定の理由
 - (1) 題材について
展覧会をひらくことにより、学芸員の仕事などを知り、作品鑑賞に興味を抱かせる。
 - (2) 生徒の姿態について
3年生文系の中で、自由選択によって履修している。1年生次より、作品についての文章や自分の作品についてのアピール文章などを書いたり、普段から何かにつけ感想やレポートなどを書かせたりして、文章を書くことには慣れている。
 - (3) 指導について
展覧会企画から作品選定にいたるまで、個人的な思いだけでなく、指導者側やそれぞれのチームワークと話し合いによって、作業を進めていくようにする。週に二時間(45分)という短い時間の中で、手際よく作業が進むようにさせる。
3. 目標
 - ・ さまざまな作品に実際に触れることで作品鑑賞の力を身につけることができる。
 - ・ 展覧会を企画することで、客観的な視野や考えを持つことを学ぶことができる。

4. 指導計画

学 習 活 動	時 間	指 導 上 の 留 意 点
1. 導入 展覧会を知る・作家の作品を観る ・資料を観る	4月 1	・プロの作品を観る。 ・さまざまな作品のちらしや図録を見て、どのような展覧会があるのかを知る。 ・学芸員の仕事について直接聞く。
2. 展開 講師講演「学芸員の仕事について」 講演「展覧会のつくりかた」 ・企画書の作成 作品選定、取蔵庫見学(校外) 作品についてのコメント原稿作り 展覧会名を決める ・チラシ案内用の捺捺文の作成 作業 ・展示図作成 ・会場模型等作製 ・チラシの作製 ・キャプションの作成 ・作品についてのコメント校正	5月 1 6月 2 2 6	・展覧会の作る手順について学ばせ、自分だけの企画書を作成させる。 ・解散ではなく、できるだけ自分の感性で選ばせる。 ・選んだ作品について、調べたことではない自分なりの解釈をさせる。 ・指導者側と生徒の思いを展覧会名に込められることを学ばせる。 ・展覧会名を決めるにあたって、展覧会のあいさつ文を全員に書かせる。 ・分担して、作業をすすめていく。 ・コメント作成には、何度も校正を入れていく。
3. まとめ 作品展示に立ち会う 感想、鑑賞会	10月 2	・展示作業を見学する。 ・感想などを述べあう。

- 6 乙の費用負担の根拠確認
(1) 乙は、この覚書の締結と同時に、上記5において負担する経費の予算措置をしていることが明記されている文書を甲に提出しなければならぬ。その文書は、第46回全国高等学校美術・工芸研究大会(2009 兵庫大会)又は兵庫県高等学校教育研究会美術・工芸部会の事業計画書・予算書、又はそれに準じるものとする。
(2) 甲は、(1)の文書により、乙が上記5において負担する経費の予算措置をしているか否かを確認する。
(3) (2)において、甲が予算措置を確認することができない場合は、当該確認がとれるまでは乙に対する作品の貸出しを行わない。
- 7 作品の取扱に係る確認事項
(1) 集荷・返却時の出品作品のコンディションチェックについては、乙の担当者と甲の学芸員が行い、充分な状況把握を行う。
(2) 集荷・返却時における作品の安全確保については、専門業者が作業を行い、甲の学芸員と乙の担当者が現場立会いを行うことにより確保する。
(3) 出品作品が取蔵庫から搬出される時から、展覧会の終了後に取蔵庫に搬入される時までの管理責任は乙が負うものとする。
(4) 上記3の委託業務の実施にあたり、関係法令上措置しなければならない事項は、すべて乙が事前に行うこと。
- 8 展覧会に伴う収入の扱い
展覧会に関して収入が発生した場合、すべて乙に帰属する。
- 9 疑義の処理
この覚書に定めのない事項、又は疑義が生じた事項については、甲乙が誠意を持って協議し、解決を図るものとする。

資料3 展覧会チラシ (A4)

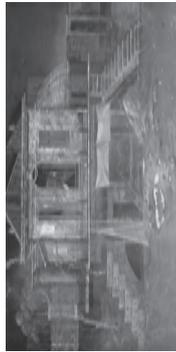
ぼくらの視点×あなたの出会い
 一高校生学芸員による企画展覧会—
2009.10.14wed-17sat
 AM10:00～PM18:00
 イーグレひめじ 特別展示室
 入場無料

作品鑑賞風景

この展覧会は、ぼくたち高校生が自分たちの感性だけで、つまり「ファーストインプレッション」によって、直感的に選んだ姫路市立美術館所蔵の作品を展示しています。あえて、この展覧会では、作者の名前や、時代背景、価値にはこだわらず選びました。そして、作者が何を考え、何を伝えたいのか想像をめぐらせ、自分なりにその作品と本気で向き合いました。
 私たち高校生側、指導者側の「2つの視点」をより感じとっていただけたら幸いです。
 そこにまた、あなたの視点を足していただくことでさらにこの展覧会が趣き深いものになるでしょう。
 あなたも僕たちも議論の中へ参加してみませんか。



野村正 白ウサギ

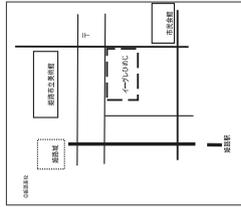


保田浩 静・夜



上野長雄 静リ節

出品作品： 姫路市立美術館の所蔵作品より12点
主催： 第46回全国高等学校美術、工芸教育研究大会
<2009兵庫大会>実行委員会
協力： 姫路市立美術館
会場： イーグレひめじ 特別展示室 (姫路市本町68-290)



お問い合わせ 姫路市立姫路高等学校(前野) TEL.079(297)2753

資料4 アンケート集計結果

回答数：58

性別									
男	50.0%	不明	1.7%	不明	5.2%	不明	1.7%	不明	19.0%
女	50.0%	10代	22.4%	姫路市	56.9%	大変良かった	55.2%	チラシ	6.9%
総計	100.0%	20代	10.3%	神戸市	5.2%	良かった	39.7%	その他のポスター	52.2%
		30代	8.6%	大阪府	1.7%	普通	3.4%	人から聞いて	3.4%
		40代	15.5%	尼崎市	1.7%	総計	100.0%	ホームページを見て	6.9%
		50代	17.2%	明石市	3.4%			学校のポスター	5.2%
		60代	20.7%	その他県内	6.9%			その他雑誌	1.7%
		70以上	3.4%	佐用郡	1.7%			複数回答	8.6%
		総計	100.0%	その他県外	12.1%			たまたま今日来たら	25.9%
				加古川市	5.2%			先生・友達から聞いて	6.9%
				総計	100.0%			美術館のポスター	5.2%
								以前から	1.7%
								関係者	1.7%
								学校授業	1.7%
								総計	100.0%

交通手段									
不明	8.6%	今後の予定		作品解説の同		教育関係者の		2009兵庫大会	
J R→徒歩	39.7%	不明	37.9%	時展示の感想	55.2%	感想	34.5%	参加者	19.0%
山電→徒歩	3.4%	姫路城	3.4%	よかった	36.2%	参考にならなかった	3.4%	その他一般	34.5%
自動車	19.0%	その他	29.3%	普通	5.2%	その他	0.0%	未記入	46.5%
自転車	12.1%	美術館	15.5%	やや不満	1.7%	未記入	62.1%	総計	100.0%
徒歩	10.3%	この展覧会のみ	13.8%	不満	0.0%	総計	100.0%		
バス	6.9%	総計	100.0%	未記入	1.7%				
総計	100.0%			総計	100.0%				